

大正期における白杵石仏の研究について

仲嶺 真信

I 調査・研究とその周辺

(1) 初めての白杵石仏の紹介

「(前略)大分県は石仏の国(中略)。人皆此地に遊ぶものは唯別府の靈泉あるを知りて他の史実のあることを知らない。実に此地は法界の浄土(中略)。如此石仏が盛に造立されしかは未だ研究せぬが其全国に散在してある處から考ふれば何か面白い事があるに違いない(後略)。」とは大正7年帝室博物館・文部省古社寺保存会から派遣された新納忠之助氏の説¹⁾であるが、近代以来、おそらく初めて学会に紹介された最も優れた日本の石仏は、白杵石仏であろう。国外の石仏では、既に明治43年、京都帝国大学の小川琢治、濱田耕作両博士が、初めて龍門石窟を訪問し、後昭和16<1941>年には、故・濱田博士に捧げられた『龍門石窟の研究』²⁾が刊行された。これは、博士の弟子の水野清一・長広敏雄両氏の研究成果であるが、その巻頭に小川博士の序文が記されている。つまり「(前略)私は明治43年9月青陵博士と共に洛陽小旅行を試みて、伊闕に遊び石窟を観たから、博士に代って本篇に序言を冠せよとの両君の希望を空しくする能はぬので、我々両人の当時の追憶談を兼ねて、この小旅行の喚起した感想を略述してその責を塞ぐことにする。

(中略)又此の旅行から五年を経て、豊後で大分白杵等の石仏を発見して、初めて日本磨崖仏の立派な作品の存在を世界に紹介し得たのも此の体験に負うたのである。(後略)³⁾傍線仲嶺」

とまれ、既に大正2年8月、小川琢治博士は、別府にて開催された夏期講習会を縁に白杵石仏を初めて探訪された。以後地理学・地質学専門の博士は、2回に亘り詳細な踏査を実施。その成果は、大正3<1914>年の、小川琢治著『日本石仏小譜』(図譜)³⁾に結実。さらに、小川博士は、大正3年『国華』に「九州の石仏(一)(二)」⁴⁾、と題して連続で発表。これは特に佐賀・大分両県の石仏に関する紹介論文であり、中国の石窟及び石仏の意義を踏まえての先見性を持つ画期的な研究であった。その後この研究に触発されて、いくつかの論文や紹介記事が発表されたが、最も堅実にしてかつ高度な学術性に裏打ちされた大系的研究を継承されたのは、濱田博士であった。大正11年4月、博士は初めて、東洋美術史専攻の澤村専太郎助教授を伴って、また大正13<1924>年1月には、京大教授・松本文三郎博士は、白杵石仏の視察を実施。この時の濱田博士の成果の一端は、同年『中外日報』に掲載⁵⁾、翌年にはその総合調査の成果を発表。すなわち、大系的でかつ膨大な報告書『豊後磨崖石仏の研究』⁶⁾(以下『豊後磨崖仏』)である。なお、これにやや遅れて大正14年、博士の単独論文「日本の磨崖石仏像(上)・(下)」⁷⁾が矢継ぎ早に発

表された。ちなみに『豊後磨崖仏』は、高度な専門領域を持つ複数の学者によって組織された考古学・美術史学の観点からの報告であり、今なお学術的価値が極めて高い。

以上早くも簡略ながらやや立ち入って、近代における初めての臼杵石仏紹介の事情について述べてきた。そもそも本稿では、臼杵石仏に関する諸先学の研究の歩みを回顧しながら、以下にその意義について、特に日本の石仏研究の黎明に相当する大正期に焦点を絞り、いくつかの調査研究資料を紹介しようと考えている。ちなみに諸先学の諸説に関して特に造営年代の問題を中心に分類するならば、次のような結果が得られる。つまり、①造立年代を論文中にて明示しない立場。②伝説そのものを信用して造立年代を考える立場。③伝説をある程度は参酌する立場（その一：弘法大師以前の造立説／その二：藤原時代説）。

以上の諸説が見られるが、なお具体的展開について言及する前に研究史を回顧する必要がある。その方法の一つとして、ひとまず明治から大正期の関連する時事をも加えながら、主に臼杵石仏に関する研究の様相を年譜として一覧しよう。

(2) 臼杵石仏に関連する諸論文・著作とその周辺の関連時事

(*本文中に採録した論文に関しては、注記に入れたのでここでは、発行所を省略した)

明治22年<1889>10月 岡倉天心、フェノロサ等『国華』創刊

明治39年(大正13年まで) 中国仏跡調査。後、仏教史蹟研究会から常磐大定／関野貞『支那仏教史蹟6帙6冊』『支那仏教史蹟評解5冊』を昭和4年刊行

明治39年10月1日 伊東忠太「支那山西雲岡の石窟寺」(『国華197号』国華社)

明治39年11月1日 伊東忠太「支那山西雲岡の石窟寺(承前)」(『国華198号』国華社)

1906-08年 第2回中央アジア踏査／スタイン：楼蘭、敦煌等調査

1907年 ペリオ敦煌文書発見・入手

明治42<1909>年 11月12日付朝日新聞「敦煌石窟の発見物千年前の古書巻十余悉く仏国人に持ち去らる」

☆明治43年 小川琢治・濱田耕作両教授初めて龍門石窟訪問

☆明治44<1911>年 大谷探検隊・吉川小一郎、敦煌へ

☆大正2<1913>年 濱田耕作、英国滞在中(大正5年まで)

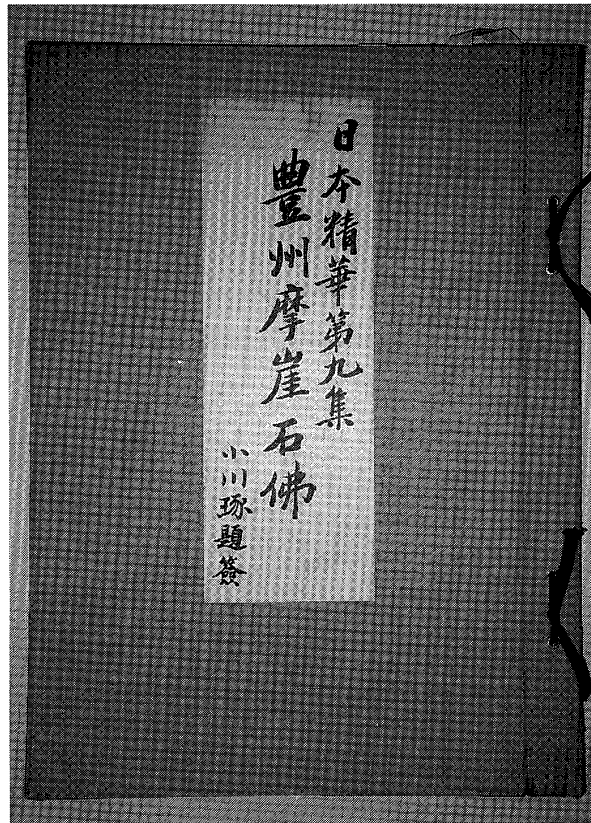
☆大正2年8月 小川琢治博士、別府にて開催された夏期講習会を縁に臼杵訪問。以後2回に亘り詳細な踏査(小城長郎『深田の石仏』昭和4年6月刊参照 *以下『深田』と省略)。

☆大正3<1914>年 小川琢治『日本石仏小譜』

☆大正3年9月 小川琢治「九州の石仏(一)」

☆大正3年10月 小川琢治「九州の石仏(二)」

- 大正4年 『西域考古図譜』(大谷探検隊収集品)
- 大正4年8月 日豊線、臼杵まで開通(交通不便な九州の片隅『深田』)
- 大正5年1月 京都帝国大学教授・工学博士・天沼俊一、臼杵視察。
- 大正5年6月5日 天沼俊一「深田の石塔」
- 大正6年～昭和4年の間に5回、仏・儒・道・三教の史蹟を踏査 常盤大定『支那(中国)文化史蹟13冊』(1975年法蔵館より再刊版)
- ☆大正6年<1917>6月 大村西崖『支那(中国)美術史彫塑篇』国書刊行会(なお序：伊東忠太序：関野貞 序：望月信亨・宗教大学学長，大正4年6月10日)
- ☆大正6年9月1日 大村西崖，日名子実三と共に臼杵石仏の調査(『深田』)
- ☆大正6年9月15日 大村西崖「大分県下の古石仏に就いて」
- ☆大正7年4月 皇室博物館学芸委員・文部省古社寺保存会委員・新納忠之助，臼杵調査(『深田』)
- ☆大正7<1918>年5月 大村西崖『東洋美術大観 第15 彫刻部』
- 大正8<1919>年 和辻哲郎『古寺巡礼』岩波書店 5月23日第1刷
- 大正8年8月 澤村専太郎「アジャンター石窟寺に於ける彫刻(一)」(『国華351』 国華社)／「同(二)」(8年9月，『国華352』)／「同(三)」(8年12月，『国華355』)／「同(四)」(9年5月，『国華360』)／「同(五)」(9年6月，『国華361』)。なお，澤村氏には「アジャンター石窟」に関する以下の諸論文もある。
- 「アジャンター石窟寺の彫刻文様に就いて(一)」(『国華377』(10年10月)／「同(二)」(『国華378』10年11月)／「同(三)」(『国華383』(11年4月)／「同(四)」(『国華384』11年5月)／「同(五)」(『国華385』11年6月)／「同(六)」(『国華393』12年2月)／「同(七)」(『国華394』12年3月)／「同(八)」(『国華395』12年4月)／「同(九)」(『国華396』12年5月)／
- 大正9年<1920>8月1日 大村西崖「豊後の磨崖石像」／朝倉文夫「豊後美術史の研究を提唱す」／中村不折「日本第一の石仏と其の保護に就いて」*朝倉氏関連記事(『深田』)
- 大正10<1921>年10月から翌年2月まで会津八一，関西，中国四国九州を巡る(『深田』)
- ☆大正10年1月 東京帝国大学教授・工学博士・関野貞，史蹟名勝天然紀念物調査のため臼杵訪問(『深田』)
- 大正10年3月 画家・富田溪仙，臼杵視察(他日必ず国宝に指定さるると思う『深田』)。
- 大正10年4月1日 田口掬汀「泉都から磨崖仏へ」
- 大正10年4月11日 天沼俊一「満月寺址の石塔及板碑」／小林正義「満月寺の磨崖石仏像に就いて」／中村不折「臼杵の磨崖石仏像に就いて」／新納忠之介「磨崖石仏に就いて」
- 大正10年4月20日 工藤利三郎『豊州磨崖石仏 日本精華・第九輯』(表に小川琢題簽／喜田貞吉氏は序に「日本精華・第九輯豊州石仏の発行を聞きて」識す)(挿図1)
- 大正10年8月 関野貞「天龍山石窟」(『国華第32編第375号』)／*後『支那の建築と芸術』昭和13年9月10



挿図1 図録『豊州摩崖石仏』

(大正10年4月20日)

日，岩波書店に収録 *天龍山石窟は大正7年初めて関野博士が発見，「西遊雑信(上)〈天龍山石窟〉」として収録)

大正10年8月20日 常盤大定『支那仏蹟踏査 古賢の跡へ 第一』金尾文淵堂

大正10年8月 宗教大学教授・小野玄妙，美術学校教授・岡田三郎助と共に，帝国美術院から石仏調査のため派遣。後「大分の石仏に就きて」報告講演筆記(『深田』)。

大正10年9月8日 「福岡日日」帝国美術院の調査の記事(小野玄妙，岡田三郎助)

大正10年9月20日 岡田三郎助「大分石仏の系統」

大正11<1922>年 小野玄妙「大分の石仏に就て」(帝国美術院 非売)

大正11年1月 会津八一「石仏私見」(地方新聞連載記事／『深田』：臼杵石仏は，日本の古美術中の最も優秀なものの一つ。)／画家・橋本関雪，臼杵視察(『深田』：何も彼も標準を奈良に取るのは誤った観察)。

大正11年3月 小城長郎，愛媛県和気村太山寺へ出張(満月寺との関連資料調査)。同じく山口県平生町般若寺を訪問(満月寺，蓮城寺とも同一縁起が判明。『深田』)／同年3月28日 小野玄妙「大分佐賀両県下の石仏」

大正11年4月 濱田耕作教授，澤村専太郎助教授を伴い豊後石仏視察(『深田』)

大正11年7月 地元で臼杵石仏保存会を組織。太山寺宮崎智全老師(70余歳)，満月寺へ 巡錫(満月寺再興の念願，大正12年，支那・印度の仏蹟巡拝後も紙面の往復，しかし実現せずして遷化『深田』)

- 大正11年 8月 東京帝国大学工学部長・工学博士・塚本靖，白杵石仏を視察（『深田』）
- 大正11年 8月 鉄道省史蹟調査囑託・小此木忠七郎，白杵石仏を視察（『深田』）
- 大正11年 9月 内務省史蹟調査会委員・文学博士・黒板勝美，白杵石仏を視察（『深田』）
- 大正11年10月 西本願寺管長・大谷尊由師，白杵石仏を視察。史蹟名勝保存法により大分県から仮指定告示，だが昭和4年まで本指定なく，宝の持ち腐れ（『深田』）
- 大正12<1923>年 1月15日 田邊孝次「新発見の大分の石仏」（『美術月報』232 美術月報社）
- 大正12年 3月25日 常盤大定『支那仏教史蹟』金尾文淵堂（支那仏蹟踏査 古賢の跡への 続編／大正11年9月～大正12年2月まで調査）
- 大正12年 5月9日 小野玄妙「附 大分県熊野の大仏について」（『極東の三大芸術』丙午出版 *（『小野玄妙仏教芸術著作集第五巻』開明書院 昭和52年6月27日）
- 大正12年 8月 内務省史蹟考査員・荻野仲三郎，田沢金吾と共に白杵石仏を調査（『深田』）
- 大正12年 9月 関東大震災
- 大正13<1924>年 1月 京都帝国大学教授・文学博士・松本文三郎，白杵石仏を視察（『深田』）
- 大正13年 2月1日 岡田三郎助「大分及佐賀県の石仏」／田邊孝次「新発見の竹田の石仏」（『国民美術』242 国民美術協会）
- 大正13年 4月 大阪毎日新聞記者・菊池幽芳，白杵石仏を視察（『深田』）
- 大正13年 4月 濱田耕作「豊後の石仏にかんする一考察…石仏製作の基礎的素養…」
- 大正13年 7月 山階宮藤麿王殿下，白杵石仏に御来臨（『深田』）
- 大正13年 8月1日 佐藤孝任『雲崗大石窟』（北京）華北正報社
- 大正14年 1月1日 直良信夫「上代に於ける帰化人の仏的活躍と豊後の石仏との関係」
- 大正14年 8月10日 濱田耕作『豊後磨崖石仏の研究』
- 大正14年10月1日 濱田耕作「日本の磨崖石仏像（上）」
- 大正14年11月1日 有賀喜左衛門「濱田教授の『豊後磨崖石仏の研究』」
- 大正14年12月1日 濱田耕作「日本の磨崖石仏像（下）」
- 大正14年 九州電気株式会社専務取締役・棚橋琢之助，私財一千円を提供し，木柵建設を大分県に委託。（十三仏前庭の木柵工事に際して古瓦発見，考古学に造詣深き村本信夫は，奈良と判定。）（『深田』）
- 大正14年12月 小野玄妙「宇佐の八幡と大分の石仏」（『(II) 宗教研究二ノ六』* 白杵石仏に関しては触れていない）
- ☆大正15年 6月24日，宮内省より山縣武夫式武官，白杵に出張。スウェーデン国皇太子・グスタフ・アドルフ親王殿下並びに同妃ルイズ殿下が，東洋美術及び考古学御研究のため白杵石仏を訪問する旨を伝える。（『深田』）
- 大正15年10月 京都帝国大学講師・京都府技師・坂谷良之進，内務省特別保護建造物修理工事に関する用務で視察。 第二のアジャンター（『深田』）
- 大正15年 9月2日 スウェーデン国皇太子・グスタフ・アドルフ親王殿下御一行横浜御安着。

(『深田』)

大正15年9月12日 濱田耕作博士御進講題：『京都府下並に奈良大分両県下に於ける考古学的研究について』(赤坂御所にて1時間半『深田』)

大正15年9月13日 スウェーデン国皇太子夫妻、宮中にて日本国皇室を表敬訪問。(関東、奈良・京都御見学『深田』)

大正15年10月6日 スウェーデン国皇太子御一行、近畿見学後、神戸から軍艦木曾にて別府へ、亀の井旅館宿泊。(『深田』・『豊州新報』『大分新聞』)

大正15年10月7日 スウェーデン国皇太子御一行、白杵見学。小川琢治、濱田耕作両博士御随行。大分元町石仏、白杵石仏。(『深田』・『豊州新報』『大分新聞』)

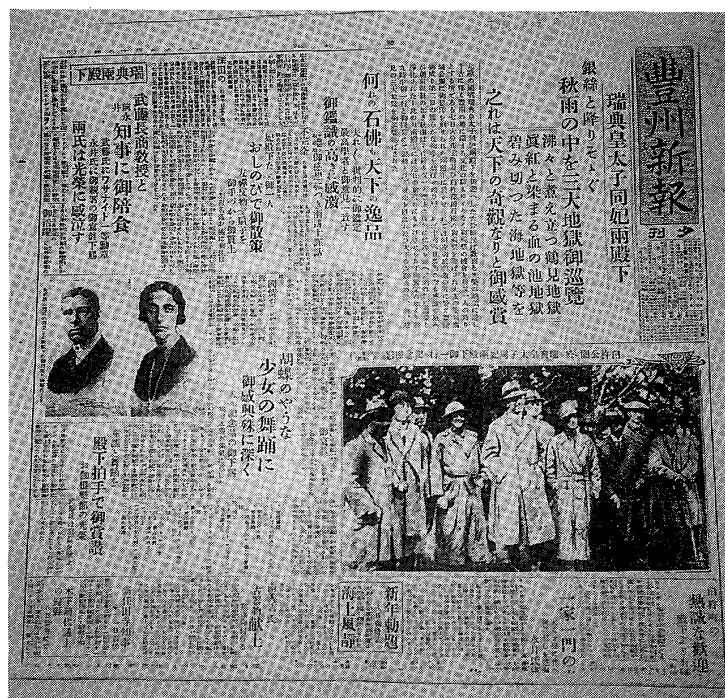
大正15年10月8日 スウェーデン国皇太子御一行、別府発下関經由釜山へ(慶州見学。『豊州新報』『大分新聞』)

(3) 石仏調査研究の経緯と意義

前掲年譜からも判明するように既に明治末年から、中国大陸における仏教遺跡の調査活動が実施されている。明治43年龍門石窟を皮切りに、敦煌石窟へも日本人の探検の手が延びる頃、濱田博士は英国へ留学。丁度その滞英中に、小川博士が白杵石仏を初訪問されていることは、極めて象徴的な出来事。また、石仏研究の学術的デビューを飾る大正3年の小川博士の業績から、調査も世評も第一次のピークを迎える大正15年、遠路極東の石仏研究のためにスウェーデン皇太子御夫妻が大分・白杵を訪問されている。これは考古学に強い関心を抱かれているスウェーデン皇太子が、既に濱田博士発表の白杵石仏関連の著作に接していたからである。ともあれ白杵石仏が国内外においても名声を博したことを顕示する最も記念すべきニュースであった。ちなみに当時の新聞記事は、白杵石仏視察時間は1時間45分と報じている(大分合同新聞社提供⁸⁾/挿図2)。

ところで、大正11年の日本における石仏の存在は極めて希少で、ましてやその評価はおろか、保存対策についても世間の認識は極めて低く止まっていた。とはいえ、既に小野氏は濱田氏の研究の意義を称え、さらに先見の明から卓見を披露しているのだから、次にそれを紹介しよう。すなわち「(前略)大分佐賀の石仏の如き、材質が石であり破壊が甚だしく毫も潰しがきかない、従って物質上の価値は全く零であるが、その学術上の参考上の価値は非常なもので、我が国古文化研究の根本資料として一般国宝以上な極めて重要な位置。(中略)。殊に濱田博士の報告書公表は、此の石仏を世界の学壇に紹介せられた訳で、最早今日では単なる大分県人等の石仏ではなく、我が国有数の真の国宝として、極東古美術界に於ける一名物。(中略)。此の頃内外の貴賓が相繼いで態々見学せらるるのも決して余所事でないのである。(中略)。別に積極的な保存の計画が立てられぬとすれば、せめて土地の人だけには、是れ等石仏の学術的価値を十分に理解してもらい、相誠めて汚損破壊を防ぐこと、並に既に破損して現場に放置してあるものなどは(白杵の諸

像の如き), 仮令片々たる石切にせよ, 適当に保管することにして欲しい。』⁹⁾と見識の高さが窺える。



挿図2 スウェーデン皇太子関連記事
(大正15年9月7日)

II 諸先学の調査・研究の概要

以下に主に造立年代に軸を置きながら, およそ三つに分類される諸論文を紹介しよう。まず諸論文の論旨を要約しながら, 次に適宜, 管見を加える方法で記述する。

(1) 造立年代を示さない初期の段階

1) 小川琢治氏の見解

小川氏の研究については, すでに『臼杵史談 第86号』¹⁰⁾で簡単に触れたが, 今回はやや詳しく紹介しよう。すなわち, 大正3年「九州の石仏(一)(二)」⁴⁾の題で, 佐賀・鶉殿と大分・植田の石仏を重点的に紹介。しかし臼杵石仏については簡単に触れているだけであるが, その学術的意義について初めて公表した先駆的報告である。

小川博士は大正2年8月豊後に旅行した際に, 大分市内の石仏を見学。たまたま臼杵石仏の事を聞き及んだ。その時の臼杵石仏の様子は, 大分市内の石仏よりも保存状態も優れ, 尊像の数も多く, 技巧も見べきものがあった。たまたま丁度, 9月には内田寛一氏が郷里唐津より帰学した際, 肥前相知的鶉殿石窟の存在についても知る所となり, 豊後諸石仏と異趣をなすこ

とを認識する。そして遂に大正3年1月内田氏の案内によりまず唐津近傍の石仏調査を始め、続いて豊後に至り白木、東植田の諸石窟、さらに臼杵(深田)石仏及び満月寺址を細査し、造像者真名長者の伝説を探った。地理的に奥深い豊後に分け入って調査を実施(大正3年)することは、当時の交通事情(大正4年8月、日豊線は臼杵まで開通)からは決して簡単ではなく、最終的には3月3たび豊後南部の石仏所在を探するため、大分市、臼杵町を経て大野郡三重町に至り、真名長者最初の建立伝説のある蓮城寺を訪ね近傍の石仏を探っている。この調査での最も重要な発見は緒方村野中の薬師三尊、つまり石窟が完全に保存され、彩色も損傷を受けず、大分、深田等の諸仏よりも鮮やかに痕跡が目立ったこと。本来地理学・地質学の立場に立つ小川博士は、自らの任務を謙虚にしかも堅実に次のように披瀝している。すなわち「余は芸術鑑賞の素養なく、又仏教研究の目的を有せざるも、偶然此等の石造彫刻を発見すると共に種々の疑問湧出し、特に此の如く自然露頭に彫りつけて其製作の現地に永遠に保存せられたる作品の、独り考古学上に重要なのみならず、九州に於ける仏教伝播の沿革を知り、文化芸術の径路を察するに裨補する所小ならざるを想ひ、獲たる所の諸石像の写真説明を紹介するに当たり、敢えて自ら探らず試みに見聞せる所に就き梗概を挙げて博雅の一燦を博せんとするものなり。」⁴⁾

(2) 伝説そのものを信用して造立年代を考える説

1) 村本信夫氏の見解¹¹⁾(推古時代)

先ず初めに、小野玄妙氏が臼杵石仏について、大陸石彫仏像の美的極彩の終末であると指摘(後述)したことを受けて、村本氏は小野氏の終美説に全く信を置くことは出来ないと反論している。すなわち小野説について「所謂仏教文化輸入の道筋の可能性を推考して日本に於ける石仏の造工年代を考定したものであって畢竟するに支那の仏的美術に幻惑して日本の内的文化の推移を無視したものの説」と反駁している。また独自の説としては、伝承に見える日羅も蓮城も共に応神仁徳朝の帰化漢人の派裔であり、日本の石彫美術の発源は帰化人の力に依る所多く、その年代は従来の研究者の説よりもなお古く、特に石彫芸術は、奈良朝以後に見事な結実が見られたと述べている。要するに村本氏は、文献に依拠し、しかも伝説に忠実であるため、さらに石仏造立の背景を帰化人の末裔に起因することを力説しているが、実際の磨崖仏を考古学・美術史学の方法を駆使して観察すれば、その判断は正鵠を得ていない。

(3) 伝説をある程度は参酌する立場

<1> 弘法大師以前の造立説

1) 大村西崖氏の見解(a, b)

まず、大正6年のa論文(「大分県下の古石仏に就いて」)¹²⁾から見よう。

東京美術学校教授・大村西崖氏は、臼杵出身の学生・日名子実三氏を介して臼杵石仏の存在

を知ることになった。まず大村氏は、元町石仏について、伝説を根拠に仁聞律師の造立と見做し、さらにその年代を奈良朝と推論。また、不動明王像は、密教渡来以前の儀軌が未だ一定しなかった頃のものと指摘した。これは後述の帝国美術院から派遣された小野玄妙氏の説とも重なるが、今日は支持を得ることは難しい。ちなみに管見では藤原時代(11世紀後半)と推測される。一方満月寺を開山したという伝承を持つ百濟僧・日羅について大村氏は、信すべきものと考えている。ただし、その年代が敏達天皇の頃(推古以前)という伝承は、明らかに立証できないが、仏像様式からは、養老前後頃(奈良朝初期)のものと確言している。また古園石仏中の如来が、古密教像であることを明言しているが、この点については、後述のように濱田博士が疑義を呈示し、逆に藤原期の密教との関連を指摘している。次に大村氏は、いわゆる古園石仏を挙げ、その周辺を大日山と呼ぶことから、本尊を大日像と推察しているが、この時既に頭も欠落し、尊名の判断が難しいと記している。(恐らく当時は、智拳印を示す手は未発見であったと考えられる)。

さて最も困難な問題は、配置に関することであるが、大村氏は、大日を中尊とし、阿弥陀、釈迦、阿閼、実相等の諸仏と脇侍から構成されていると見ている(五智如来という判断はまだない)。なお如来に関して、螺髪のみと宝冠像との二種から成立していることを指摘。一方満月寺仁王像について、法隆寺仁王門(奈良時代)と似ているというが、管見では、前者については室町時代と推測している。さらにその奥にある宝篋印塔(日吉塔)を、初唐頃としているが、天沼博士の指摘によれば、鎌倉中葉を下らない¹³⁾。

ところで大村氏は、保存対策と造像様式及びその意義について以下のように記す。つまり現存の断片を充分調査してセメントで結合して見たならば、大に旧体を回復する見込みはありと述べているが、当時はまだ保存科学を駆使する方法が発達していないので、きわめて素朴な発想に止まっている。また、これらの諸仏について、大正6年『支那美術史彫塑篇』刊行直後の大村氏は、隋末初唐の様式との見解を示し(しかし、今日そのような様式観は支持されないが)、奈良付近にあるものと共に、芸術史上と宗教上から、他に類例がないとも指摘している。また破損については、大友宗麟の破壊説を採用しているが、この点について、後述のように小野氏はやや疑義を抱きつつ断定を避け、一方濱田氏は自然崩壊によるものと推測している。最後に、これらの諸像に関しては、来る10月審美書院から発行する『東洋美術大観 第15 彫刻部』¹⁴⁾に紹介するはずとコメントしている。

次に、大正9年のb論文(「豊後磨崖石像」)¹⁵⁾を検討して見よう。実は、大村氏の調査前に、内務省により新納忠之助氏が調査を実施している¹⁶⁾。もともと大村氏の調査は帝国美術院によるものであるが、もともと雨潤会からの一千円の寄託が動機になっている。したがって、まずは実地踏査と可能な補修に絞るべきことが述べられている。

ところで、大村氏の白杵石仏観は壮大であり、以下のような卓見を披露している。すなわち、白杵石仏は、法隆寺の壁画、龍門石刻、アジャンターの石窟などと共に、きわめて重要であると言及。また研究調査の展望として問題点を以下のように指摘している。つまり、①年代と作者については、伝説に見える養老年間の律師仁聞か、②大日山の伝承から仏像は大日を中心と

したものか、③仁聞及び石仏群が密教に関係するのか、④奈良朝の頃、すでに豊後に密教が渡来していたのか、⑤龍門石刻に似ているのは何事を暗示するのか。当時は、今後の調査と研究を待たずには言及できないとしているが、実はすでに前掲の a 論文において大日山像について、古密教像、大日、養老年間と指摘している。

2) 朝倉文夫氏の見解：(「豊後美術史の研究を提唱す」)¹⁷⁾

朝倉氏は豊後石仏について、実見以前に記しているが、奈良朝の美術として、古来日本でこれに匹敵すべきものはなく、ただ龍門石窟、あるいは印度の石窟像が、これに比較し得るだけという。ちなみに、朝倉氏は、奈良朝又はそれ以前に日羅の存在が認められることを事実として考えている。

3) 中村不折氏の見解 (a, b)

a 論文「日本一の石仏と其保護に就て」¹⁸⁾において中村氏は、同会員として、帝国美術院が調査することに賛意を示し、また石仏の系統について、後記の小野氏の所説、すなわち弘法大師以前の密教との関連が推測できるが、その具体的系統は不詳であることを述べている。さらに破損した石仏に関しては、恐らく当分は、豊後磨崖仏も、特別保護建造物及び国宝としては定められず、放任されたままであろうが、まずはせめて保護区を設けて、番人を設置する必要があることを提言している。一方 b 論文「臼杵の磨崖石仏像に就いて」¹⁹⁾において、既に大村氏も同趣旨を指摘しているが、中村氏も、系統や価値の上から関連する龍門石窟、アジャンター石窟、法隆寺壁画等と並んで堂々たる世界的芸術であると卓見を披露している。また、美術家の立場から、その意義についての認識不足を痛感し、次のような課題について言及している。つまり、石仏の系統、形体の名称、作風の優劣等についての研究も大切だが、実はその前に保存法と経費についての方が当面の問題であること。丁度この時、豊後石仏の調査・保存のために、雨潤会から帝国美術院への寄金があったことを記し、さらに前掲論説同様、保護対策への提言を行っている。ちなみに、中村画伯は、東洋の書道関連の収集家としても有名である。臼杵石仏に関する見解は、全面的に支持するという訳にはいかないが、一部においては首肯される。すなわち、大日山の呼称から、密教系統と推測し、その大日如来の優秀さを指摘、しかも造像者は、一人ではなかろうと言及したことは注目に値する。一方造立年代については、藤原以降と見る私見とは大きく異なるので、この点を批判的に見ていく必要があるが、養老のみならず天平からそれ以後までの順々の造営と考えている。これは次の点と共に疑義の見られる点であり、十分な注意を要する。すなわち、今より千二百年前の密教系統の作で、弘法大師より古いものとしている。しかし濱田博士の指摘を待つまでもなく、管見でもとてもそのようには見えず、藤原以降の造立としか考えられない。もっとも以下の指摘と提言は、大正期の論説中においては際立っている。つまり「(前略) 早晚国宝に推定せらるるであらう。(中略)。一日も早く之が保存法を講じて研究の歩を進めたい。是は予一人の希望ではあるまい」と。国宝指定

を受けた現在から、70余年前の貴重な提言と指摘であることをしっかりと再認識する必要がある。

4) 小林正盛氏の見解（「満月寺の磨崖石仏像に就いて」²⁰⁾

既に紹介したが、小林氏も帝国美術院の事業について触れている。つまり、大正10年（5月22日）の『大正日々』において、満月寺趾にある磨崖仏の研究を実施することが報じられたという。その後、小林氏が大村氏から聞いた話では、それは黒田清輝氏の紹介で、古河男爵の雨潤会から金圓の寄付を受託することになって、彫刻部会員の外に仏教家や、歴史家にも依頼して、其研究に着手することになったという。また小林氏は時の草稿を補綴して、研究方面以外からも、是非満月寺の再建を希望して止まないと胸の内を明らかにしている。ちなみに、小林氏が満月寺と深田の磨崖仏を訪問したのは、大正6年11月、肥前鹿島に興教大師（覚鑿）の誕生地遺蹟復興の記年祭を終えてからのこと。この時に真野長者の伝説も採集した。論文中の大分の磨崖仏と満月寺石仏の紹介は、ほとんど、大村氏の「大分県下の古石仏に就いて」に依拠しており、したがって内容は重複している。

5) 帝国美術院（岡田三郎助、小野玄妙両氏²¹⁾）の見解

『大正10年9月8日 福岡日日』によると、帝国美術院より派遣された美術学校教授・岡田三郎助、仏教大学教授・小野玄妙の両氏は、約18日間にわたって大分郡、大分市、大野郡、北海部郡、西国東郡地方の石仏を調査し、この後に唐津付近の石仏調査を行う予定になっていた。両氏の調査の成果は次の通り。すなわち、①評価：この種の石仏は奈良にわずかに二、三体あるのみであるから、大分県は実に全国無比。臼杵は石彫りが完全に発達した極致。②系統：往昔トルキスタンより西藏に懸けて旺んであった石仏とは同型に属するから、文化的、芸術的意味に於いて実に得がたい。③作者：内地人の製作ではなく、朝鮮人の手に成ったもの。④年代：豊後において最古例は、元町石仏で天平年間。⑤保存法：空通をよくし、雨を防ぎ地蜂を巢喰わせぬようにし、苔を生やさぬようにする。早晚廃滅すべきものであるから、今の内に原型を取って石工像となし、原色を附すとか、または白色のままで永遠に残す事もよい。③④については、後述の様に大いに疑義がある（詳論は後）。

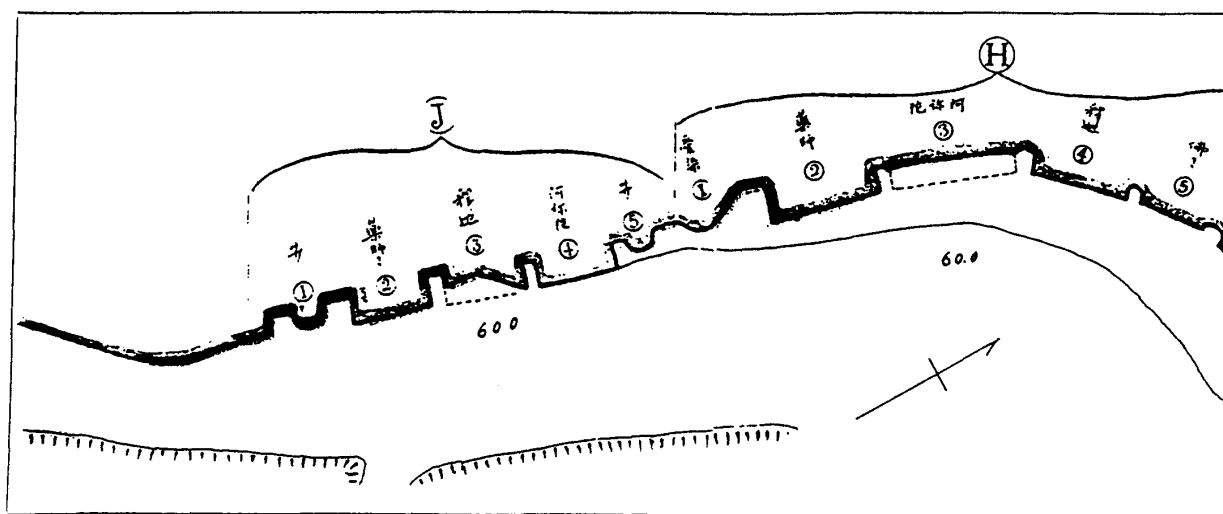
6) 岡田三郎助氏単独の見解（a, b）

まずa論文「大分石仏の系統」²²⁾から。一部重複するが、岡田、小野両氏は、前掲新聞記事の様に、豊後石仏の調査のため帝国美術院より派遣された。この時の岡田氏は写真撮影と実測を担当し、石仏の宗教及び歴史上のことは小野氏が分担した。以下は岡田氏単独の報告である。まず、大分県下の石仏分布を示す。すなわち、大分市元町、臼杵町深田、大分郡植田、大野郡井田、同郡菅生（打對瀬）、西国東郡田染村、其他。次に深田石仏として臼杵石仏群について述べている。すなわち、当時ひどく破損していた通称・隠地藏（山王石仏）は、地藏尊ではないこと。

また、通称・堂ヶ迫石仏群はかなり破損したものが多いが、以下の第一区から第六区（括弧内は、国宝指定以前の名称／挿図3参照）に区分している。列記すれば、第一区（ホキ第二群第二龕／写真1）、破損も甚だしく尊名不明。中央に比較的大きな像，その左方は六本ばかりの仏部や菩薩の立像。第二区（ホキ第二群第一龕／写真2），形も大きく従来も注目，中央は坐像で両脇に菩薩立像。右方は頭部が半壊，左方は比較的形が残り，左手に蓮華（観音）。中央は弥陀如来か，いわゆる弥陀三尊。様式は尚研究の余地あり。第三区（ホキ第一群第四龕／写真3）。中央は地藏尊，両脇に十王風。他の像よりも時代は下る，あるいは追刻か。第四区（ホキ第一群第三龕／写真4），中央に智拳印・金剛界大日，台座は随分高く，中央に穴。その両脇に一体宛の仏像，同じく坐像。その両脇の窟の入口に菩薩立像。両脇像は顔面が破損落下。第五区（ホキ第一群第二龕／写真5），窟は左右が大破，仏像も高く，殆ど同じ大きさの三尊。中央は阿弥陀，右は薬師像か，左は釈尊か。中央像は頭の右半分が壊れ，継合して見ると実に雄偉荘嚴の相好，傑作中の傑作。第六区（ホキ第一群第一龕／写真6），三尊。大部分は破損し不明，左は阿弥陀の形相，中央と右とは同形で薬師と釈尊か。三尊の両脇に一体宛の立像。尊名不明。

一方評価，年代，作者，系統等については，以下の通りである。すなわち，評価：日本の石仏は奈良に数点あるが，大分県は他に類例がない程優秀な石仏が多い。確かに大分県の石仏は日本一。年代：最古は大分市元町の石仏で，天平以前。深田石仏はそれより百年前後下る。作者：記録では朝鮮から渡来した彫刻家とするが，朝鮮は支那の誤りとしている（前掲記事とやや異なる表現）系統：（前掲記事と重複）。保存：（前掲記事と重複）。

次にb論文「大分及佐賀県の石仏」²³⁾によれば，岡田氏は，まだ大陸の石仏及び磨崖仏を實際見ていないが，大分・佐賀のそれを雲岡，龍門，天龍山等に関連づけて考えている。特に山王神社の西側にある三体仏を尊名不詳（小野氏も同様）としている（管見では，山王本地仏曼荼羅との関連から，中尊・薬師，右脇・阿弥陀，左脇・釈迦と推測される²⁴⁾）。さらに岡田氏は，仏龕が浅く，舟形光背の輪郭が，蓮華の一弁を鑄んでその真中に三体仏を安置（一光三尊形式）していると指摘しているが，これについては見誤りと思われる。管見では，後壁に残る痕跡から各尊とも別々に朱彩



挿図3 ホキ第一群配置図

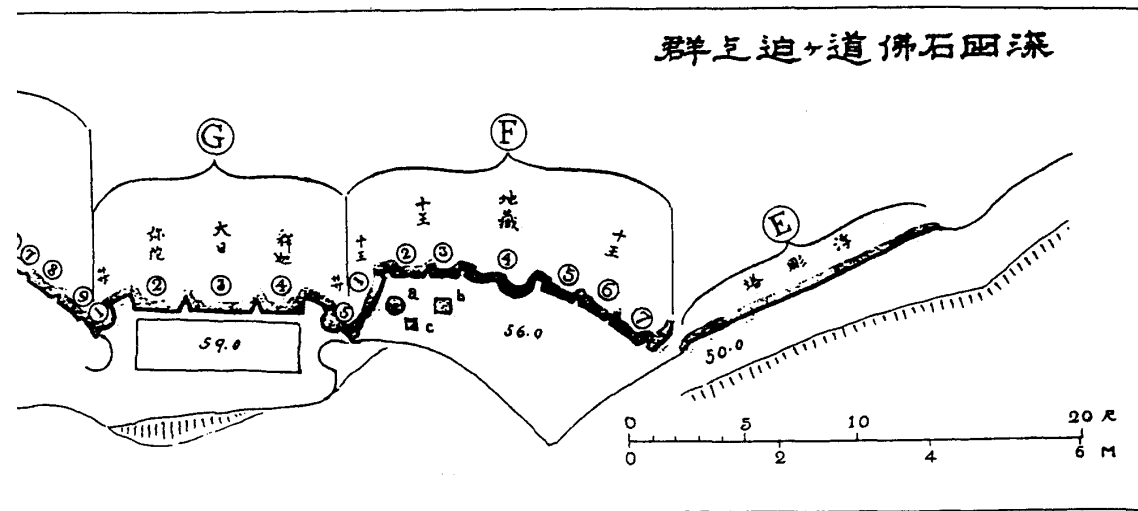
で描かれた拳身光背を負うものと推測される。

7) 小野玄妙氏の見解 (a, b)

まず a 論文「大分佐賀両県下の石仏」²⁵⁾から。特に大分元町及び臼杵の石仏について、はじめ一部の学者や有志の間で関心が抱かれたが、僅かに二三人が、その所見を雑誌などに発表したに過ぎなかった。実は当時の小野氏は、伝聞しながらも軽率に考えていて実見せずに行ったところ、幸いにも帝国美術美術院によって大分及び佐賀両県下の石仏調査をすることになった。すなわち、帝国美術学校教授・岡田三郎助と共同の調査を実施。大正10年8月19日から9月11日に至る約三週間、両県下の三十余所の石仏所在地の視察に従事。この時は、第一回の調査で、両県下の石仏所在地の確認が主目的であったが、厳密な学術的踏査の意味を成していなかった。したがって、より具体的な造営年代、信仰の内容まで立ち入った歴史的観察については、容易に判断が出来なかった。その理由は、和銅養老の頃、あるいは藤原時代と立証するなど、年代差に非常な隔たりが見られたから、換言すれば、大分の石仏については、口碑伝説はあっても、確実な文献が殆どないからであった。なお、報告において大分県は35ヶ所、佐賀県は4ヶ所の所在地と尊像の数を記す。特に臼杵石仏について(北海部郡各地の諸像の中で)次のように言及しているのを要約しよう。

まず小野氏は、真名長者満月寺建立の伝説について、後世の製作で、荒唐無稽、あるいは虚構捏造の説として把握し、さらに蓮城の実在性については、いささか疑問であるが、ほぼこれと類似する史的事実があって、石仏の造顕に至ったと見ることは穏当であろうと述べている。次に配置に関して。つまり大日山は、大日を中尊とする合計十三体の尊像が確認され、特に脇侍は四仏四菩薩等と見ているが、四仏は尊名未詳としている。一方、四菩薩は台東両家に伝わる金剛界五方五仏、胎藏界中台八葉九尊の説のいずれにも一致しないと指摘している。ただし、もし胎藏界四仏ならば、宝幢、開敷華王、無量寿、天鼓雷音、逆に、金剛界四仏ならば、阿閼、宝生、阿弥陀、不空成就となり、なおさら面倒であるが、仮に胎藏界四仏(憶測)による一応の

深田石佛道+追点群



配置を次に示す（ただし丸印は確定／写真7①②③）。

多聞天／降三世明王／觀自在菩薩（冠中に化仏，○）／文殊菩薩／開敷華王如来／阿弥陀如来／中尊大日如来（○）／宝幢如来／天鼓雷音／普賢菩薩／弥勒菩薩（冠中に宝瓶，○）／不動明王（○）／持国天 *下線部は，管見では疑義あり。さらに，十三仏の他に仏龕の向かって右に金剛力士。もとは二尊対面（欠落，不明）。

次に隠地蔵について，釈迦，阿弥陀，薬師の三尊仏と推測している（写真8）。また次に中尾村の大小六個の仏龕については，大同，龍門の諸龕の様な一種荘嚴な感じと述べている。まずは山上より下に向っての順番（濱田博士もこの区分法を採用／挿図3 参照）に概観しよう。第一龕：中央に釈迦，左脇に阿弥陀，その隣に尊名未詳菩薩立像，右脇に薬師，その隣にもとは菩薩像か。第二龕：中央に阿弥陀，左脇に釈迦，右脇に薬師。第一龕と第二龕の間：愛染明王（形相と台座から）。第三龕：中央金剛界大日，左脇釈迦，その隣に尊名未詳菩薩立像，右脇阿弥陀，その隣に尊名未詳菩薩立像。第四龕：中央に地藏，両脇に十王十体（倚像，道服）。なお龕の右壁には五輪塔数基を彫出。第五龕：中央阿弥陀，左脇に観音，右脇に勢至。第六龕：約八体ほどの尊名未詳の仏菩薩が併立。完存は二三体で他は破損。一方，満月寺周辺では丸彫の蓮城法師坐像。真野長者夫妻坐像，一对の金剛力士等。要するに，この深田満月寺の草創について，伝説の一部に疑問はあるが，相当に古い時代であることは，石仏そのものの示す所によって明確であると指摘している。

ところで，白杵石仏といえは，深田石仏を示すことは周知のことであるが，実は白杵の大字前田字門前にも崩壊した石仏群が確認される。以下はその配置。一仏龕中に中尊大日，と左右二脇侍菩薩（管見では，菩薩形を含めた如来三尊，あるいは阿弥陀三尊とも考えられる）。向かって左端に多聞天，その反対の方には，像容が確かな不動明王及び二童子が配置されている（写真9）。

さて次に「造立年代の諸問題」について見よう。大分石仏の造立について，和銅養老頃，あるいは藤原説も見られ，実に年代の差が懸隔している。もともと造立年代を定めるには，第一に，歴史的文献の確実なる保証を有し，第二に，遺品の形式と内容がその時代に適合すること。第三に，信仰とその経軌の所説に一致すること等の条件が必要。ちなみに，小野氏によれば，様式からの判断は，ややもすれば非常に独断に陥りやすいので，以下に多面的観察を踏まえて，帰納的に一往の見解を展開している。

まずは「日羅及び蓮城法師の事蹟とその造像」についてから始めよう。

大分郡及び大野郡では日羅（百濟），北海部郡深田では蓮城（支那），国東郡速見郡及び宇佐郡では，仁聞菩薩（支那）等の伝承が残っている事実について，小野氏は次のように結論している。すなわち，大分の日羅は，たまたま国史に記載された敏達朝の日羅と文字を同じくする所から，ついに混肴して同一の如く伝えらるに至った。例えば，もし白杵に於ける石窟仏寺創建の事蹟に関する史料が発見されることがあるとするならば，蓮城寺記の記載（荒唐無稽）以上の驚く可き事柄があるのかもしれない（管見では，白杵石仏の造立に関して，畿内と豊後における政治と宗教の緊密性を媒介にして，撰関家，天皇，院政，豊後国守，地元の豪族大神氏等が複合的に関与しているものと推測してい

る)。また小野氏は、深田大日山の十三尊だけでも国分寺一つを建てるだけの費用はかかったものと見做し、一般的に石窟の場合、必ずその龕前に大同や龍門と同様に殿堂を設けるはずであると推測している。(この指摘は、覆屋の存在が確認されているので至当といえよう)。そして、伝説上の日羅と蓮城については共に実在するが、ただ奈良期の人であるという判断の下に、石窟仏造工に関わった偉業を認めたいと独自の見解を示している。さらに、大分の石仏が遺存した理由は、少なからず中世の大神氏から分かれた緒方、植田、臼杵、賀来諸氏の外護を受けたり、あるいは大神氏自らも造立に関与した可能性があると言及している。(卓見できわめて注目すべきであるが、その証明には綿密な検討を必要とする)。さらに、石仏破損の原因は、やや不審を抱きながら大友宗麟の大廃仏の事実を紹介しているが、それが、大分県下の石仏所在地の随所でもひどく徹底的ではないことから、大友氏の万寿寺並に彦山等の諸寺破碎の目的は別に理由があったかもしれぬと考えている。ともかく、臼杵石仏は、大分石仏中において、爛熟期の優秀な作品であり、推古朝以前の作物などに擬すべきものではないと断言している。

次に「製作年代の考証」について。小野氏は、元町、東植田、浅瀬、南緒方、臼杵、田染等の主要尊像は、概括すれば八世紀、奈良朝末弘仁以前のものが大多数を占めると指摘している。しかし厳密には、例えば、大分元町千仏龕と付近の諸像、東植田村高瀬の小龕は、天平以前和銅養老頃か或は白鳳期、その他の大多数は悉く天平以後と見做し得るといふ。しかし、さらに小野氏は慎重に次のようにも説明している。つまり、養老(714-724)も、藤原乃至江戸もあろうし、その他のものには奈良も平安もあろうと、その年代について可能性の幅を広げている。ともあれ、小野氏は、第一は一般文化史上、第二は内外交通の関係、第三は仏教信仰上、第四は口碑伝説上、第五は造像の手法上を典拠にして結論した訳である。ちなみに、小野氏は、平安時代の台東両密伝承以後の形像、殊に藤原時代の特色を見出し得ないと明言しているが、この時既に濱田博士の研究論文等が発表されているので、その学術的成果を検討しかつ敬意を表してのことか、小野氏の最終的判断としては次のようにトーンダウンしている。つまり、諸像に対する厳密なる考定は、頗る至難の事業、更に後日の研鑽に待たなくてはならないと結論している。

次にb論文「弘法大師以前の密教芸術…特に大分の石仏に就いて…」²⁶⁾から。小野氏が、この論文を起草した主目的は、大分等に遺存する密教関係の彫像に関する造立年代を弘法大師以前のものとして推案することが、一般の密教教学の上から見て過誤なきや否やを、先輩諸氏に向って教示を仰ごうとした点にある。なお、既発表の論文(a)との重複も認められるが、次のように多面的に一応の考えを示している。

まず、深田大日山の中心は、十三尊中の主尊・大日と併せて五智如来。つまり、金剛界大日、阿閼、宝生、阿弥陀、不空成就から成立。しかし、それに観音、弥勒等の四菩薩を加えて、胎藏界八葉の四仏四菩薩一具をなしている所からすれば、胎藏界の宝幢、開敷華王、無量寿、天鼓雷音のように見受けられぬでもないと両面的に考えている。

次に、大分の造像と弘法大師等八家請来の密教芸術との二者間に認められる顕著な相違は、

形像と安置法であることを指摘している。つまり、深田大日は、宝冠、智拳印、金剛界で特に光背は舟形で月輪がない例が見られるが、大分の石仏は、(稀に高瀬の諸像の如く蓮坐もあるが)、概して天衣座(裳懸坐)が多く、また殆ど舟形光背を負うことを特色としている。

次に大日山の尊像配置について触れているが、a論文で紹介した胎藏界四仏を中心に据えた場合の例を挙げている。ここでは、重複しているので省略する。

以上のことから総合すれば小野氏の結論は次の通りである。すなわち、大分佐賀両県下の石窟仏像は、地理上、年代上から見ても、東亜に於ける大陸系統の芸術として最終期のもの。換言すれば極東に於ける大陸系統の最終の美。大分石仏の密教像の考察(推定)は、弘法大師等所伝のものと全然教系の違った異承の密教。大分の造像も、作者は決して一人や二人ではない(この点も卓見である。ちなみに管見では仏師の系譜も諸派の介在が推察される)。石仏の年代は、一定していないが、大分石仏、特にその密教像の主体は、決して藤原、鎌倉ではなく、どうしても弘法大師以前、即桓武天皇の延暦以前まで繰り上げてゆかねば、完全な歴史的説明を下すことは出来ない。

(4) 藤原時代説(弘仁以降)

1) 田口掬汀氏の見解(「泉都から摩崖仏へ」)²⁷⁾

田口氏は、深田の石仏を藤原中期と判断している。つまり、その面貌は天平朝の豊満具足の相がなく、飛鳥朝の鋭いところもなく、弘仁以降としか思われないと述べている。また金剛力士は鎌倉期(管見では平安と推測)と見て、一方山王山の崖は薬師三尊と推測しているが、ここは他とやや違う灰白色の岩質で、古園より硬く崩壊が余らないことを指摘している。ちなみに、ここは古園より時代が下ると推測している。さらに堂(ケ)迫という崖に、十余體の菩薩や明王がみられ、その上段には愛染明王や普賢菩薩などが認められることを触れている。また群像はひどく破損しているため、大日か薬師か釈迦か尊名不詳としている。五輪塔は「承安二年」銘を挙げ、鎌倉という判定を行っている。(これは間違いで、「承安」は藤原)。この下方の崖には丈六の弥陀三尊(いわゆるホキ阿弥陀)が位置しているが、これについても鎌倉末期か、あるいは足利時代と推測している。(これも誤りで、管見では藤原末と考えている)。また(満月寺前の)密迹金剛(仁王)とその奥の石塔に触れているが、後者を鎌倉と推測している。ちなみに、田口氏は、磨崖仏の造立者に関して、伝説上の満月長者、あるいは敏達期の百濟僧・日羅という説を、もとより取るに足らぬ言伝えとして退けている。さらに、造立の方法が龍門や大同と酷似する点から、恐らく渡来の支那人の手に成ったものと考え一説を挙げているが、これについては、手法を一見すると直ちに日本人の製作であることが分かると指摘している(管見でも、藤原期の日本の仏師の造立と見る)。しかし、残念ながらその価値についての認識はやや低く、すなわち総じて傑作とは言えないが、日本には稀らしいもので豊後の一名所たる価値は十分としている。また、大正9年豊後の摩崖仏研究費として古河男爵からの帝国美術院への一千金の寄付のことに触れ、

まだ美術院からは何の調査もないが²⁸⁾史蹟名勝として保存地に編入されたという伝聞を記している。

2) 天沼俊一氏の見解 (a, b)

a 論文 (「深田の石塔」)¹⁹⁾の中に、古園石仏、宝篋印塔、五輪塔などの図版を掲載。宝篋印塔は測量図も見られるが、「宝篋印塔型の厨子」と呼ぶことを至当としている。次に山王社と嘉応・承安銘の五輪塔は、平安時代と判断。また薄肉五輪塔群が一行九基陽刻されているが、それを背光五輪と命名。一方b論文 (「満月寺址の石塔及板碑」)²⁹⁾によると、板五輪を室町以前と断言し、宝篋印塔型石厨子(日吉塔)について、鎌倉中葉を降らないとしている。板五輪は断碑が多いが、完全に近い例(当時、女子師範学校所蔵)について、大正5年4月22日調査を実施。

3) 新納忠之介氏の見解 (「満月寺の磨崖石仏像に就いて」)²⁰⁾

新納氏は、仏像の系統が天台か真言か分からないが、仏教の性質より考えればまず真言に属する石仏であろうと指摘し、次に造立は藤原時代に属するものが多いと言及している。また石塔にも触れ、鎌倉末から足利期のものが多いことを述べている。さらに、当地方の石仏の特質は、薄肉または陰刻がきわめて少なく、ほとんど丸彫に近い磨崖像であることを指摘している。当時大分市内二箇所の石仏の他に次の箇所を参詣している (*数字は論文中のもの)。

第七 北海部郡臼杵町大字前田字門前／阿弥陀三尊 / 不動三尊像

第八 同上臼杵町大字深田字観音 元満月寺／仏部 菩薩部 天部 其他従其一至其九

前記第八の満月寺趾石仏は、大概藤原期で優逸。また寺趾に残る宝篋印塔は、藤原期と推測。二王石像の他に妙見堂(石室)には蓮城法師、真名長者、玉津比賣の三石像がみられる。日吉神社及其の付近の磨崖仏は、中国の模倣と述べ、次に各仏龕ごとの配置を列記している。(第八其一=古園石仏/十三仏)

毘沙門天立像／仏部坐像／仏部坐像／菩薩坐像／菩薩坐像(観音)／不明(大破)／大日如来坐像／仏部坐像／仏部坐像／仏部坐像／仏部坐像／菩薩坐像／菩薩坐像(普賢)／不動明王／増長天像 (傍線は仲嶺)

以上の配置は、十五軀群像になっているが、管見では下線部が誤認と考えられ、現在の十三軀からなる実態に合致しない。つまり、正しくは毘沙門天、菩薩、菩薩、如来、如来、大日、如来、如来、菩薩、菩薩、不動、増長天の十三軀と推測される。新納氏は、破壊の原因を、大友宗麟の破仏にあると見ている。さらに、以下に古園石仏以外の配置を示す。つまり、南津留字中村大尾山王山に位置する仏龕。

(第八其二=山王山) 阿弥陀坐像／釈迦坐像／薬師坐像

(第八其三=大字中尾辻ヶ平) 大形五輪塔(嘉応二年七月二十三日)／小形五輪塔(承安二年癸辰八月十五日) 日次辛亥 千部 経願主遍照金剛) 大小の五輪塔二基。(第八其四=字堂ヶ迫／ホキ第一群第一龕) 釈迦坐像 / 阿弥陀坐像／薬師坐像／愛染明王坐像

(ホキ第一群第二龕)／不明立像／不明／不明／不明／不明立像

(第八其五＝ホキ第一群第三龕) 菩薩形立像／釈迦坐像／大日坐像／阿弥陀坐像／菩薩形立像

(第八其六＝ホキ第一群第四龕) 地藏菩薩像／十王像

(第八其七) 五輪塔 十基

(第八其八＝ホキ第二群第一龕) 観音菩薩立像／阿弥陀坐像／勢至菩薩立像

(第八其九＝ホキ第二群第二龕) 菩薩部／仏部／仏部／仏部／仏部／仏部／仏部／

以上を満月寺趾の石仏群と考え、この様を一種の大小の曼陀羅に例えている。また、これらの藤原期に属する石仏は未だかつて他に比類のない上乘の作と評価している。

4) 濱田耕作氏の見解 (a, b, c, d)

以下に大正13年『中外日報』に掲載されたa論文「豊後の石仏にかんする一考察…石仏製作の基礎的素養…」³¹⁾を要約しよう。つまり、濱田氏は、石仏研究の経緯と方法論を説き、広く九州の石工的技術及び石造芸術との関連について言及している。まず、京都帝国大学の考古学教室においても、小川博士以来の因縁により、前年調査研究を続け、近々その成果を学界に発表して、確実なる基礎資料を提供したいと期している旨を述べている。それには、まず第一に、その遺物に関する徹底的な考古学的調査、換言すればすなわち、所在地の測量、仏像の実測と撮影等を行い、できるだけ精確綿密なる原状に関する知識を蒐集しなければならない。またその上、あらゆる文献伝説の類を渉猟し、歴史的考察を試み、また仏像の「イコノグラフィ」の研究をつくさなければならない。ともあれ最後に、石仏の美術史上に置ける位置を、他の作品との様式比較研究によって確立するに至って、まず考古学上の任務の大体を了し得るであろうと、美術史・考古学的見地からの概観を述べている。以上は緒言部分。以下は省略するが、論説中の項目のみを挙げよう(一 緒言 二 石仏製作の基礎的素地 三 石仏発生以前における九州の石工的技術 四 石仏と石造墳墓芸術との連鎖)。

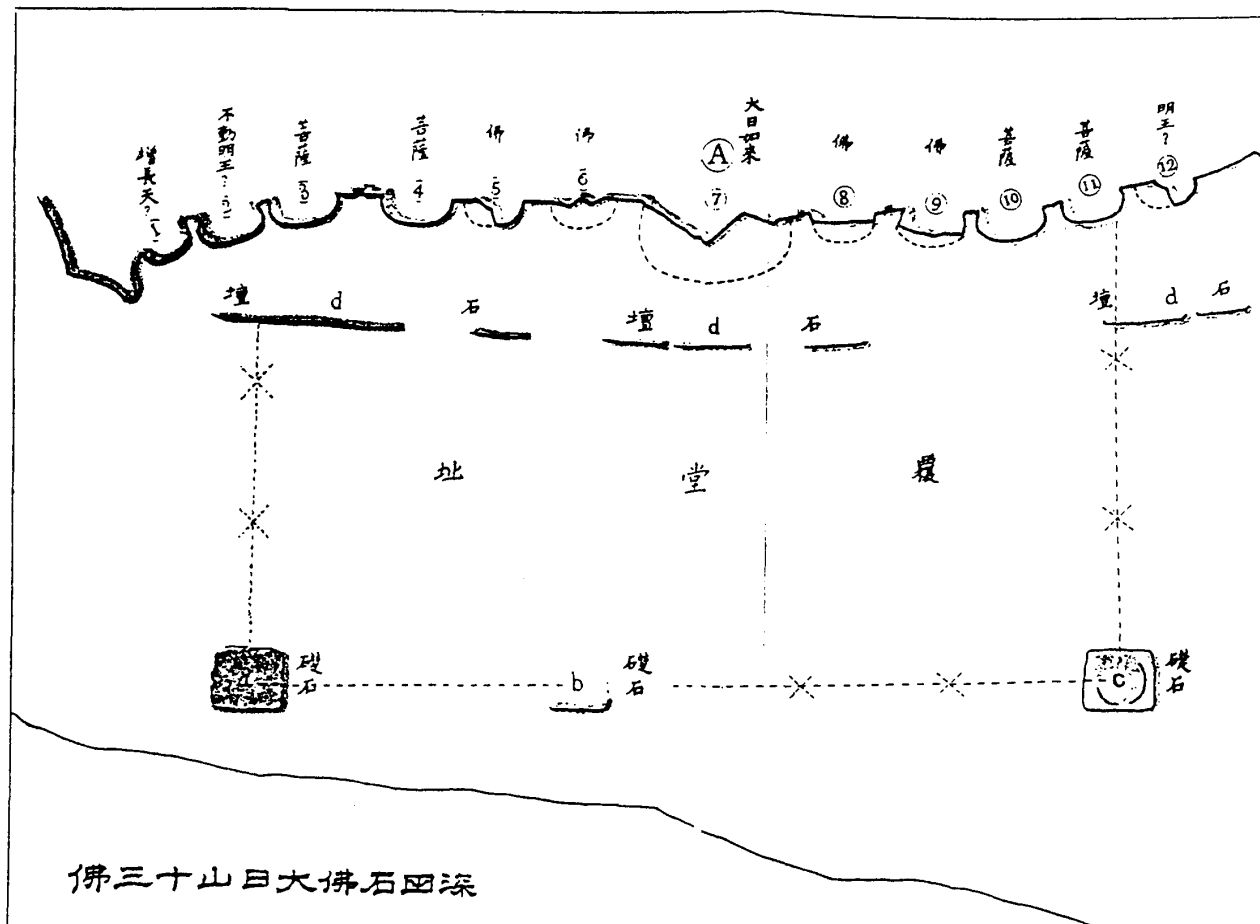
次にb論文『豊後磨崖仏』³²⁾(c・d論文の典拠)見解について。その緒言に続いて第四章に「北海部郡臼杵町深田の石仏」が紹介されている。特に深田石仏は、豊後の磨崖仏中数量と美術的価値に於いても実にその首位を占めると、高く評価している。また、石仏の造立を巡っては、次の説を紹介している。つまり、深田石仏と満月寺について、石像の主人公たる蓮城法師と真名長者とにその起源を付会しているが、もともとこの伝説以外には顕著な石仏に関する掘るべき記録も証すべき文書もない。ちなみに『豊鐘善鳴録』(寛保六年僧密雲撰)収録の「真名長者実記」と「長者由来記」に拠ると、蓮城は百濟人、長者の屋形が三重(有識山蓮城寺)から深田の荘に移るに及び敏達天皇三年から翌年にかけて大きい石仏を彫刻。又『臼杵小鑑』等に見える一説には、長者のために百濟の日羅が建立という。なお、最も規模の大きい「大日山像群」については以下の通り記している。すなわち、日吉神社(牛頭天王社、山王社)の鎮座する大日山東南の中腹に所在。興味深いことは、石仏破損の原因について濱田博士は、大友宗麟の神仏破却に帰する説(『臼杵小鑑』等)を退け、その大部分は自然崩壊によるものと見ている。この時、中尊

は手を欠き、印契不明であったが、宝冠断片の化仏などから、菩薩形であることを確かめ、よって伝説にいう金剛界大日であることを指摘している。(この時、智拳印の手は未発見であったと考えられる。平成6年新たに、大日像下の前庭部の地中より裳懸座も発掘された)。なお、中尊を除く他の如来像四軀は、儀軌だけでは解明できないが、その両側の外にあるそれぞれ二軀は共に菩薩像(以下、配置は挿図4を参照)。第四像(測図A3)は、冠の化仏から観音(新納氏は普賢)と推定している。一方、第五像(測図A12)は、舟形光背と頭部の様子から、仏菩薩と見ているが、左側の不動に相対して他の明王とすることは寧ろ困難と考えている(この点について、管見では、後記の理由から降三世明王説を否定し地蔵と見る)。第六像(測図A13)は左端の増長天に相対する多聞天。この他に左右相対する仁王があることに触れている。

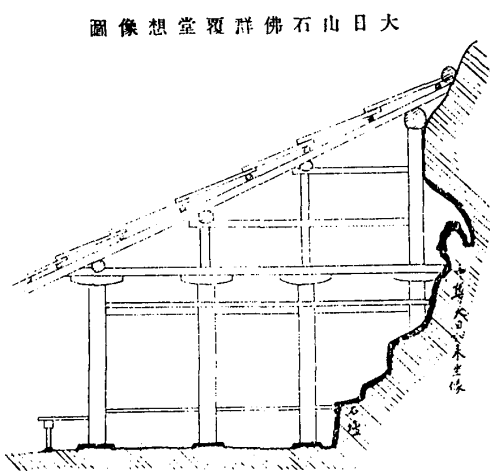
さて、従来「十三仏」と称されて大日山の群像について、濱田氏は独自の見解を展開している。すなわち、所謂十三仏は、大日、薬師、釈迦、弥陀、阿闍、文殊、普賢、地蔵、弥勒、観音、勢至、不動、虚空蔵の諸仏から成立。換言すれば、大日を除き四仏、七菩薩、一明王という構成は、古園石仏の実際の配置に見られる四仏、四菩薩、二明王(*『日本の磨崖石仏像』も同見解)、二天からなる配置とは合致しない。その上、僧形を普通とする地蔵は何処にも確認されないの、所謂十三仏説は信ずべからずと指摘し、さらに、次のように推測している。つまり、金剛界大日の中尊とする五仏(即ち大日、阿闍、弥陀、不實?成就)を現し、これに観音、勢至(ただし管見では、光背頂上に見える梵字をダン=金剛利菩薩と判読している。『白杵石仏』参照)、文殊、普賢の四菩薩を配し、更に不動と他の一明王(愛染)に、護法神二軀を加えたものであると。ちなみに濱田氏が、一明王(愛染)と推測している像について私見を述べよう。つまりこの像には、本来明王像には付随しない舟形光背が見られ(明王には火焰光背)、通用の明王像に付随するはずの側頭及び怒髪などが見られず、逆に無髪のつるつるした側頭部が確認されるので、少なくとも地蔵と考える方が正鵠を得ている。

次に、石仏群を安置していた積石壇は、一種の基壇を形成していた。発掘により礎石が三箇確認され、その上には覆堂があったと推測される。すなわち覆堂は五間二面、しかしその最両端の像を内部には収容できず、それらは屋根の張出部にあったか、或は別の設備が配されていたとも推測できる。なお、礎石は平安朝以降鎌倉期を示し、当時まだ古瓦は発見されず(のち建久年間使用の古瓦が出土)、よって板葺か茅葺(挿図5)の覆堂の存在が推測されていた(管見では、板葺か茅葺の可能性も考えられるが、その場合は、最終的に瓦葺堂宇への整備・移行があったものと推測できる)。なお、現在の道路は往古から群像に至る道筋であったことを述べているが、事實は違う。つまり白杵市教育委員会の発掘によると、もとは古園石仏の覆屋のあったとされる前庭部正面から斜め真下に続く急勾配の斜面において古い参道が確認された。よって、濱田説は修正の必要がある。

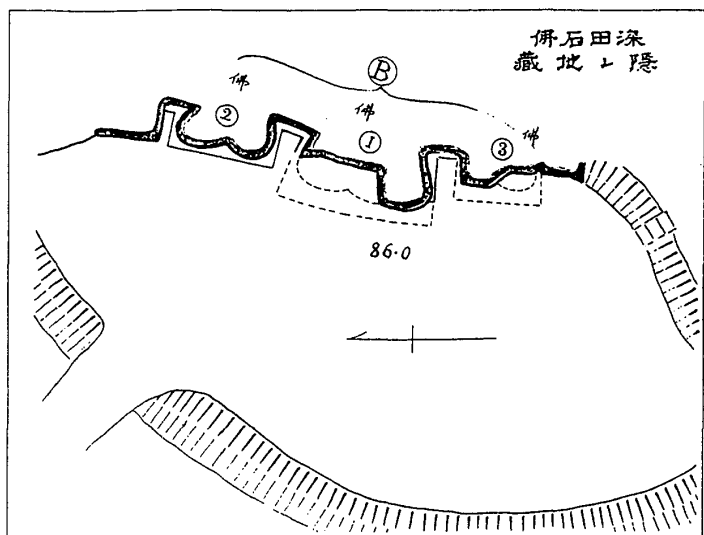
次に「隠れ地蔵群」について(挿図6)。大日山西側、日吉神社下方の仏龕は地蔵ではない。新納氏は、釈迦を中心とする弥陀、薬師の三尊仏と見ている。濱田氏は、中尊は白杵石仏中第三位(像高;ホキ阿弥陀中尊:290.0cm /古園大日:286.8cm *現存部分/山王中尊:271.7cm)と指摘して



挿図4 古園石仏配置図

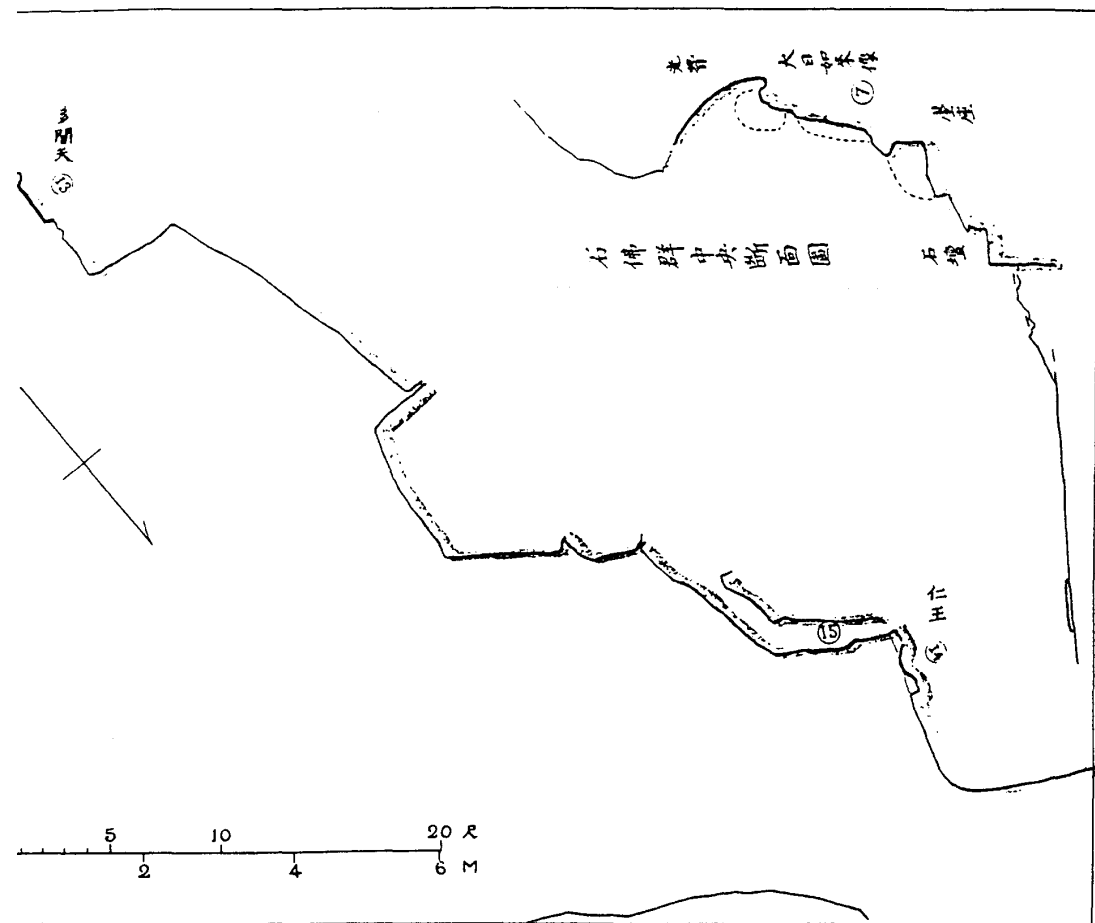


挿図5 古園石仏覆堂想像図



挿図6 山王石仏配置図

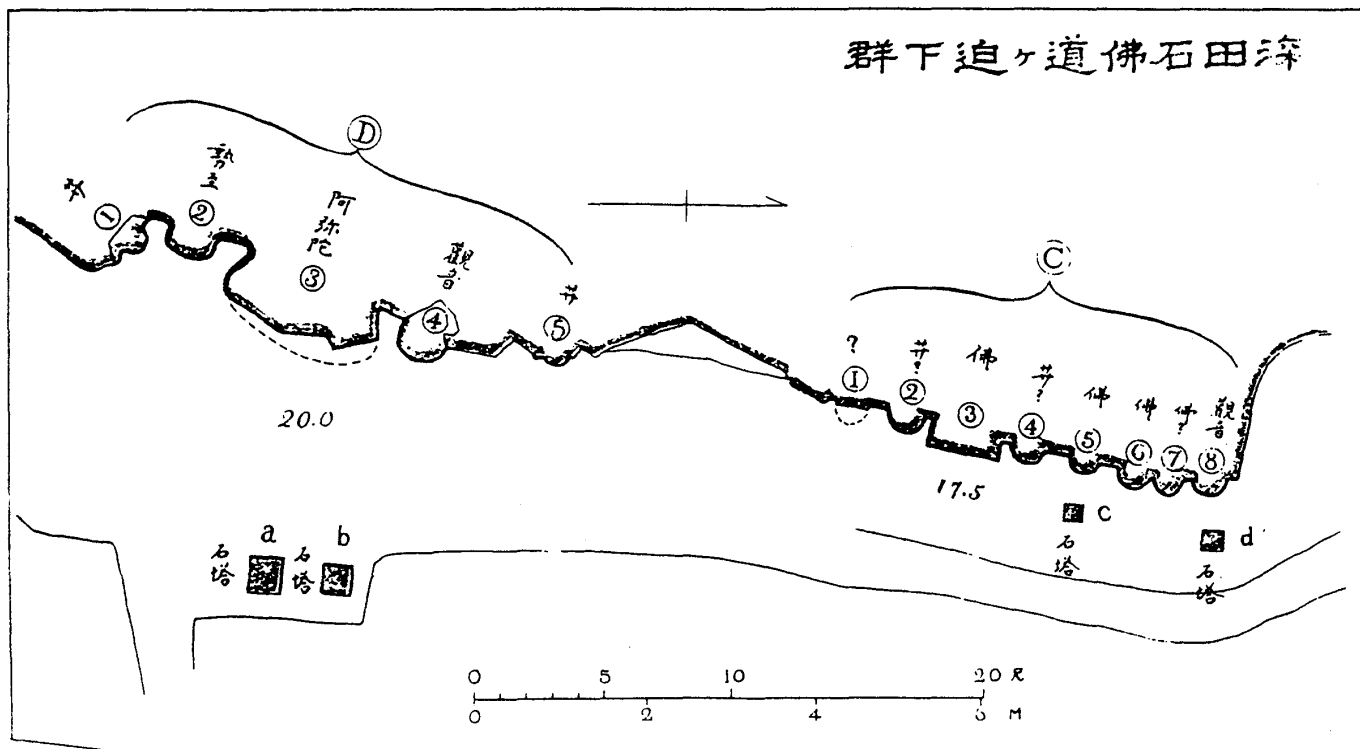
いる。しかし、実は（頂一顎：95.0cm）面長（57.0cm），面幅（60.0cm）等の面貌から見れば、抜群の第一位。また、中尊は釈迦でもよいが、両脇を薬師と弥陀とする証拠はないので、寧ろ小野氏と共に尊名不詳の三尊として置く方が安全であると述べている。しかし、既述のように管見



では、如来三尊の問題及び山王曼荼羅、あるいは仏龕の立地条件（東方薬師の位置）、比叡山根本中堂本尊・薬師などの諸問題から総合的に勘案して、中尊・薬師、右脇・釈迦、左脇・阿弥陀と推測している。

次に「堂ヶ迫下群（C、D／挿図7）」について。まず、C群は、約八軀で、一軀（座像）を除く他は皆立像。特にC 8は観音か。これらについて従来は過去七仏（『長者実記』説）と見做していたらしいが、軌儀から見れば、所謂過去七仏説は不可能である。

次にD群（ホキ阿弥陀三尊／挿図7）について。まず博士は、中尊は結跏趺坐、法界定印の阿弥陀と見て、頭部は体軀に比例して少々過大と指摘している。しかし、私見ではこの指摘について疑義を抱く。つまり、この像について、臼杵石仏全体から総合的に判断すれば、裳懸座像の蓋然性が高いものと推測されるので、その場合、濱田氏の指摘とは逆に、体軀部分がぐっと広がりをもって見えるはずである。したがって、頭部はそれに応じて丁度調和するはずである。なお、右脇立像（D 5）は観音で、その面貌は典雅。一方左脇侍（D 2）は勢至で、髻冠部を一部磨損、右側が剥落。工藤氏の図譜（『豊州磨崖石仏 日本精華・第九輯』大正10年4月20日³³⁾）では顔面だけは完存しているので、それ以後の破壊か。この像の（向かって）左側のD 1は頭部喪失の菩薩、観音の右側のD 5は菩薩立像。三尊はそれぞれ舟形光背を刻出。C群とD群の間（現在その部分の岩盤が崩れているが）に宝篋印塔、板五輪等が散乱していた。



挿図7 ホキ第二群配置図

次に「堂ヶ迫上群像」について。すなわちE～Jまで(挿図3)。E群は懸崖に五輪塔を刻出ししており、その年代について、天沼氏は鎌倉期と見る(既出)。F群は、地藏十王像。十王は、衣冠束帯道服姿で笏を持つ。注目すべきは、いずれも倚像で、立像では無かろうという指摘。鎌倉初期の円応寺の十王の作よりもなお古様という評価を与えているが、管見では、鎌倉末から室町にかけての時代の幅の中で考える方が妥当と見る。

次にG群は、大日の中尊(智拳印)とする三尊と侍立二菩薩。左脇(G4)は本文中では阿弥陀、図では釈迦(したがって、右脇(G2)は本文中で釈迦、図では弥陀)となっていて矛盾している。恐らく図の方の記入の誤りであろう。

次にH群について。中尊・阿弥陀を両脇に釈迦・薬師の三尊。その(向かって)左端下に愛染明王が、さらにH群の(向かって)右端に約五尊程が剝落している痕跡が認められる。ちなみに、H群の左端の多臂像(H1)について、濱田氏は四臂(後の谷口鉄雄氏も誤認している。『日本の石仏』昭和33年 朝日新聞社)としているが、凝視すれば通用の六臂であることが判明する。特に獅子冠と怒髪は、愛染明王の標識で、また、蓮華座下に宝瓶らしきもの、さらに右手に杵、左手に弓らしきものが確認される。管見では、鎌倉以降まで下がるものと推測され、濱田博士も堂ヶ迫石仏群の中でも別の時に付加されたものと指摘している。

次に「J群」について。まず、堂ヶ迫諸像群中最も高所にある三尊坐像。両脇は二菩薩立像。そのうち向かって右側(J5)は観音か。よって左側(J1)は、勢至菩か。H群はその規模からして、まず第一に造られたものと予想される。次いで或いは殆ど同時にJ群が刻出され、その

後G群の造立に至ったものと推測される。(F群の向かって)左端が特に窮屈であるが、これはFの地蔵群十王の(向かって)左群中の一像を側壁に彫出する前に、既にG群が造頭されていて、岩壁をF群の(向かって)右側と均整に出来なかったことによる(実は、堂ヶ迫諸像群を対岸から一望する際に、その群像中最も高所にあるJ群の台座を基準にして、横一列に水準面を引いて見ると、向かって右側に行くに従って仏龕全体の中央部が徐々に低くなっていることが確認される。したがって、管見ではこの順序で仏龕の開鑿が進行したものと推測される)。濱田氏はE群塔婆列について、F群基壇部の後に刻出されていると指摘しているが、これも管見では、先ほどの開鑿順に従うものと見ることができる。

(挿図3参照)

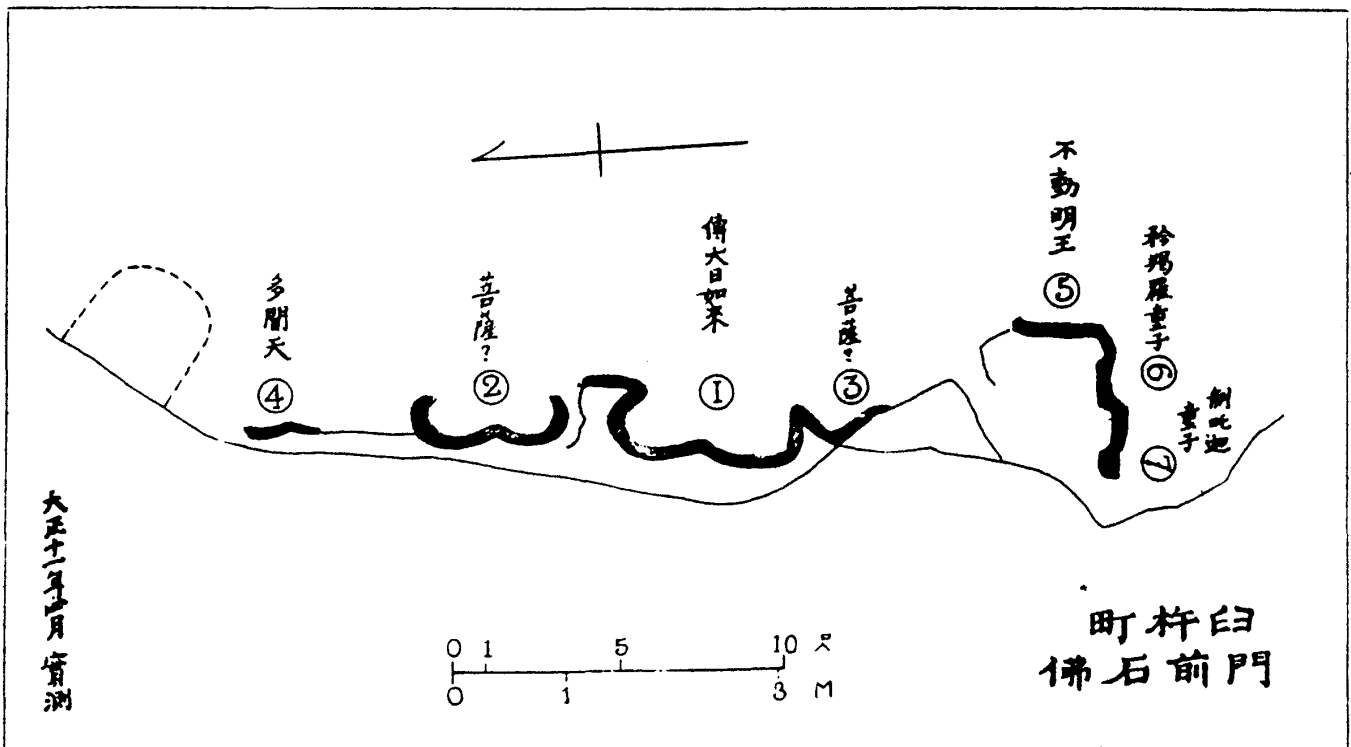
次に「石塔類」について。まず、天沼氏によれば、日吉塔(宝篋印塔)は無銘だが、鎌倉中期を下らないもの。特に、堂ヶ迫台地上にある五輪塔二基は、聖塔とも呼ばれ「嘉応二(1170)年歳次七月二十三日」の銘文がある。各部に発心、修行、菩提の五種子の梵字を刻む。一方「千部如法経願主遍照金剛 承安二(1172)年歳次壬辰八月十五日日次辛亥」の銘文が認められる。共に地中に埋没して銘文が見えなかったのを、大正四年小川博士調査の際、地輪部まで掘り出して偶然発見という(小川博士談話)。他に、板五輪と板碑などもあるが、概して深田の石塔の年代を平安末から室町と見ているが、目的は納経供養であろうとしている。

次に「製作年代と美術的価値」について。まず、濱田氏は、文献から年代の確証できないことを以下に説く。つまり伝承を重視する立場もあるが、深田石仏は様式上絶対に敏達朝の蓮城や日羅等の手に帰することができないと明言している。換言すれば、大日、不動、愛染等の密教像と、平安以後特に鎌倉に目立つ地蔵や十王等とを含めて勘案すれば、奈良朝ではなく平安以来の作とする説に賛同する旨を明示している。特に大日山の十三仏は一種の曼荼羅(管見では、金剛界曼荼羅中の成身会との関連が認められる)であり、本尊大日は優秀。この他の諸像は殆ど柔和な表情と穏健な手法である。前者は一群の彫刻家の中で特に卓抜な技術を有する人。後者はこれに従属した少々平凡な技術家と考えられる。特に大日の面貌は或いは鎌倉初期の風気に近いと見ているが、この点は看過できない。管見でも鎌倉の作風に近いものがあると考えている。しかし、他の諸像の面貌は藤原期の温和典雅な表情が認められると指摘。とはいえ、全体的に古園石仏の様式は、大野郡菅尾村浅瀬の岩権現の諸像(菅尾石仏)と類似しているので、平安中期以後藤原期の作とすることが不穏当ではないとしている。一方、隠れ地蔵も時代は大日山像群とは大差ないが、その中尊の面貌手法等は、後者とは全く別人になる者と推測している。全く同感で、この指摘も重大である。管見では、例えばその系譜について、伊東史郎氏の指摘³⁴⁾のように、天台系寺院の仏像にまます確認されるやや偏平な螺髪を持つ古様を帯びた作例(京都・六波羅蜜寺薬師坐像、京都・岩倉長源寺薬師立像等)との関連を考えている³⁵⁾。ちなみに濱田博士は、容貌が甚だ秀麗を欠き、特に左端像は少々優れ、別個の技術家の作になるためかと指摘している。ただこれら三尊の技術的価値が劣っている所から、大日山のそれよりも遅れた時代に置く説には賛同できないと言及している。この点についても、全く同感である。ただし、容貌が甚だ秀麗を欠くという指摘には疑義を抱く。なぜなら、現在の地べたからの観察位置を維持している

限りは、見えてこないが、厳密な観察のために視角・視点・視距離等（眼の位置をやや高くし少し引き下がる）を多様に変えて見れば、堂々たる風格の顔や眼が見えてくる事実は否定し難い。この点は最も重要かつ不可避の問題として熟慮する必要がある³⁶⁾。

堂ヶ迫の諸群像中、大きさと製作の優秀なる点から見ても、第一位は、D群の三尊である。つまり、日本全体の石仏中においても、これ以上の完好の作品は他にその例を知らないと述べ、しかも藤原期の造立と見ているが、本尊の頭部が少々大で、しかも木彫と見まがう計りの技巧を持つと指摘。C群諸仏は、或いは鎌倉頃に下がるか見ている。堂ヶ迫上群の中ではH群が最優秀、藤原期で、作風は大日山像群に近いと見ている。愛染明王は鎌倉の付加かと推測。J群も近いが、技術は粗拙。G群は少々優作、H群に近いが、時代は多少降りると見ている。F群はさらに前諸像よりも後、十王像出現は鎌倉に近いと指摘。E群の石塔について、天沼説を傍証に鎌倉期と見ている。字木原の仁王石像は、右阿形、左吽形を紹介し、時代を明言しない方が賢明としている。また蓮城法師と真野長者夫妻肖像は、伝説に従えば、石仏造立時、後代に伝えん為に作られたものとの事（『満月寺縁起』）。前者は足利時代以後。後者は、法師の像と同一範疇と考えている。ともあれ、深田石仏もすべて同一時代に製作されたのではなく、主として藤原期から鎌倉期に渡って、相次いで造頭されたものと見ている。しかも藤原期の大日山の本尊や堂ヶ迫の阿弥陀三尊は、豊後のみならず日本の石彫品としても最大傑作であり、さらに地藏十王像及び愛染明王等の特殊の像があることは、日本彫刻史上極めて価値ある事実と指摘している。

次に「門前の石仏について」。前田小字大日（俗称門前／挿図8）にある。総計六体。つまり三尊



挿図8 門前石仏配置図

仏と不動、二童子及び多聞天。三尊の中央像(測図1)は、宝冠像らしい。向かって左方の坐像(測図2)も、右方の坐像(測図3)も尊名不詳。伝説により中尊を大日とすれば、その左右は阿弥陀と釈迦、あたかも堂ヶ迫G群と同様。一方、新納氏が阿弥陀三尊、左右は菩薩と見ていることについて、多少仏形に見ゆる実際とは相容れないので、大日と阿弥陀・釈迦の三尊とする方が穏当としている(しかし、管見では、密教との関連から、紅玻璃阿弥陀とその両脇侍からなる三尊形式とも推測される)。また不動と二童子、左(合掌)は矜羯羅、右(金剛棒)制吒迦で、平安末期から鎌倉初期としている。右脇端に多聞天(塔)。なお、三尊仏と不動と多聞天の配置は、豊後石仏の特質と見ている。ちなみに、白杵では豊後石仏中最も婁々出てくる不動は、門前の群像以外に顕著に現れず、ただ一体大日山の脇侍中に存在するだけと言及しているが、現在は不動坐像が一例ホキ第二群仏龕脇で発見されているので、的はずれの見解といえよう。この他に、愛染明王の造像例は珍しいと指摘している。

次に「豊後石仏の作者と時代」について。様式の比較から推定した年代は平安朝と考えられるが、文献上の証拠はない。年代は、およそ三種の見方に帰着。第一、伝説的作者の製作としてそのまま信用する見解。岩薬師は、欽明朝に百済から渡来した僧・日羅の作。深田石仏は、欽明朝に唐から渡来した蓮城法師が真野長者のために作らせたもの(一説では日羅の作)。村本信夫、鶴峯戌申『白杵小鑑』。推古時代の作。第二、小野説。日羅、仁聞の伝説を信じないで、大体石仏の造立は、北魏以来初唐武周時代の石窟寺の模倣であって、特にその直接の模範は開元年間の龍門奉先寺など。また大村氏は白杵石仏について、仁聞作とする伝説と様式からも奈良朝のものと信じている。『東洋美術大観 第15冊』。この説では豊後の主要石仏を奈良時代。第三、濱田説。大分、植田、白杵、菅尾等の石仏は様式から、推古朝でも奈良朝でもなく、平安朝。新納説も同一。ともあれ、濱田氏によれば、第一説は到底許容できない。つまり、たとえ推古様式を示している、なお直に日羅作と見ることに躊躇し、またその必要も認めない。なぜならば、弘仁様式を示す多くの弘法大師作と称する仏像や運慶の伝説のある鎌倉彫刻の場合と同断であるから。また、第二の小野説については、大体の意味において全く賛成するが、玄昉の帰朝以後東大寺造営までの間に植田石仏が造られたという点については、遂に意見を一にする事ができない。第三の平安説(濱田説)は、必ずしも新見解ではなく、多数の美術史家の大体において一致する。なお、自説の根拠を詳述するには、一篇の東洋美術史、日本美術史を概説することになると、濱田氏はその様式系譜の特殊性と問題点などを指摘している。

次に「豊後石仏の様式観」について。豊後石仏は、仏像の形相、様式、仏教の流派から京畿地方と顕著なる差がない。恐らくは京畿の仏師の「アトリエ」で習練を積んだ作家やその後継者等の手になったものと考えている。濱田氏の調査に際して採用した仏像の顔面の側線(profile outline)は、様式研究の一根拠になる。この線は複雑な様式を最も簡単に型式化し得る随一のもの。衣紋の断面と共に様式研究の模式(formula)の一である。要するに未完成だが、研究の成果を具体的に示したものであると言及している。

次に「豊後石仏と大陸の石仏との関係」について次のように言及している。すなわち龍門石

窟諸像は、従前の六朝の諸窟とは違って、前方が解放した場所に刻出せられ、仏像が覆堂の中に安置されていたのと思われる。この形式は、日本においても臼杵をはじめ多くの磨崖仏に見る所であって、もし日本の入唐の僧侶などが龍門を訪れたとすれば、当時創建なお新たなこれらの窟寺に最も感興を催し、主にそれを模倣しようと考えたに違いない。この観点において、小野氏の支那窟寺の末流、或いは終末説に異論はない。

次に「豊後石仏とその製作背景」について次のように言及している。すなわち豊後石仏造立に関する最大の原因は、適当な凝灰岩 (tuff) が豊富に産出すること。凝灰岩 (阿蘇溶岩) は元来彫刻建築の材料としては余りに脆弱粗鬆、良好な材料ではない。しかも、多孔質で各種岩石の破片などを挟有している点から、緻密均一の石質を得ることが困難。ただ硬度は花崗岩、大理石及び石灰岩などよりも遥かに柔らかい。それゆえ鑿で槌破するよりも手斧鶴嘴で切断することさえ容易であり、殆ど木材と同じ具合に取り扱い得る。豊後磨崖仏は畢竟阿蘇火山帯活動の結果産出せられた凝灰岩をその材料として発生した芸術作品に外ならない。これは、濱田氏の風土性を考慮した見解として注目すべきものである。

c 論文「日本の磨崖石仏像(上)」³⁷⁾について。大正2年小川博士は、大分臼杵等豊後の石仏を学界に紹介して、初めて日本美術史の研究上に一時期を画した。その方法は、磨崖仏の発生理由を単に地質学的制約の上に求めたことであつた。ちなみに濱田氏は、前記でも紹介した小野氏の説く豊後石仏などが、支那石窟寺の造営の末流であることについて賛意を示し、さらにその直接の模範が龍門奉先寺の仏龕であろうといわれた卓見に服することを述べている。しかし、支那石窟寺の影響が、九州へ支那から直接に流入したものであり、当時京畿地方へ伝わっていた仏教の系統とは全く別のものであるという小野氏等の解釈には、遺憾ながら一致することは出来ないと反論を行っている。つまり、小野説の一根拠は、豊後の石仏において表現された仏像の主題等が、京畿地方のものとは異なる点から出発して、この地方に奈良朝に流入した古密教の一派とする点にあるが、濱田氏は、美術の様式手法などの点から見て、敢て特殊の流派とする必要を認めない。それどころか、寧ろ支那文化は一旦京畿へ直流し、その第二次の影響が九州へも及んだものと考えるのが最も安全であると穏当な見解を示している。濱田氏の見解で特に注目すべきは、伝説(日羅=新羅人、蓮城=百濟人、仁聞=支那人)は全くの荒唐不稽の説話、作為された時代も比較的新しいと指摘していること。さらに、在来の木造彫刻の技に長じた者は、容易にこれを凝灰岩に移入する事ができるので、必ずしも支那朝鮮から石灰岩大理石の彫刻に馴れた技術家を招致する必要はなく、京畿の仏師の「アトリエ」で木彫技法に携わったものが、自然に熟練出来るということである(管見でも作者について、畿内の木彫仏師の関与を考えている²⁴⁾)。

次にc論文と一連のd論文「日本の磨崖石仏像(下)」³⁸⁾について以下に要約する。豊後石仏中、特にその数量と美術的価値に於いて最も優秀なものは、深田石仏と見ているが、ただ山水の面白さが龍門や雲岡などに及ばない平凡な点を遺憾と考えている。(この中国石窟との比較は、当時としては本場での見学を踏まえての最新の見解といえよう)。まず大日山については後述の様に、大日の中

心として四仏四菩薩二明王と毘沙門、増長の二天、仁王等から成立し、多くは無惨な状態、完存のものは殆どないことを指摘。次に隠れ地蔵の三尊は保存も善く(当時は破損度が僅かであったものと考えられる)大きな作であるが、必ずしも優れていない(管見では、この点について異論がある。つまり、一見稚拙に見えるが、実は観察する側の眼の位置を多様に移動して見れば、むしろ素朴どころかなかなか立派な面貌が見えてくることに留意すべきである)。次に、堂ヶ迫の七群中、下方の阿弥陀三尊は深田石仏中でも最も優品で、平安朝中期頃の様式を示し、大日山の中尊と並称すべき傑作と指摘している。次に、堂ヶ迫の上群(前掲b論文中、E~J群)の造営について、およその順序を推測している。つまり、大日三尊や釈迦三仏群が最初で、地蔵群は後に続く。次に、地蔵群五輪塔等は平安末期あるいは鎌倉初期頃、その他は平安後期と考えられ、その技術も決して凡庸でないと述べている。要するに、深田石仏の造立年代は、嘉応二年及び承安二年銘の五輪塔との関連から推測でき、また門前にも大日不動明王及び二童子の小群があり、平安朝後葉乃至鎌倉初期と考えられ、深田との深い関係が見られると指摘している。

一方、作者に関する伝説は全く信用できないため、主として美術的様式の上から判定する外なかったと述べている。しかし様式論は、もとより主観的要素を含むことが多いから、それぞれにおいて相一致しない点もあるが、信拠出来ない伝説的人物に付会するよりも、遥かに安全な方法と指摘している。例えば、六朝様式及びその模倣から生まれた推古様式と、唐朝以後の様式及びその影響により発生した奈良・平安様式とは、峻別し易い非常に相異なった様式、この両者の判別に関しては芸術様式を論ずるものは、殆ど迷う所がない。この点から見て豊後石仏の大多数は、決して推古様式に属するべき日羅、蓮城などの手に帰すべきものでない。逆に平安藤原の造立説は、多くの美術史家の意見の一致する所、ただ小野氏、大村等の諸氏はこれに反して奈良朝の作品とするが、その根拠を詳にしないと厳しく批判している(詳細は前述)。濱田氏は又豊後の石仏の場合に於て、その「イコノグラフィ」の上からもこれを奈良朝及びその以前の所産とすることに同意し兼ねている。

ところで、濱田氏は白杵石仏の意義、様式、技法等について次のように言及している。つまり、大日の仏頭は、畿内のその他の平安朝の最も優秀なる彫像と比較しても殆ど遜色がない。また堂ヶ迫下群の弥陀三尊の温雅な面貌は、具足円満。このような仏体がよくも粗鬆なる凝灰岩から彫出されたかを疑わしめる。豊後石仏は唐末彫像の様式を示し、またそれが日本化せられていく過程を現した平安藤原時代の彫刻として、その一部において、木彫等の最も精巧なものには及ばないにせよ、最も優秀な技術を具体化したもの、しかもその大きさから、最も「モニュメンタル」なもので、わが国の美術史研究するものの決して看過できない遺物であると。

III 石窟・石仏の調査研究の黎明

前掲の年譜からも分かるように、国外における石窟・石仏の研究事情については、明治39年(大正13年まで)常盤大定/関野貞博士による中国仏跡調査(『支那仏教史蹟評解 五冊』)が行われ、

また同年には、伊東忠太博士による雲岡石窟（「支那山西雲岡の石窟寺」『国華197号』／「支那山西雲岡の石窟寺（承前）」『国華198号』（前掲）の研究成果が発表されている。さらに、明治42（1909）年には「敦煌石窟の発見物千年前の古書卷十余悉く仏国人に持ち去らる」との記事に見られるように敦煌石窟が内外の注目を集めた（11月12日付朝日新聞）。このような時期に、明治43年小川琢治、濱田耕作両氏が初めて龍門石窟を訪問し、しかも、翌年には、当時のイギリス、フランスなどの列強に続いて、日本からは大谷探検隊派遣の吉川小一郎氏が敦煌へ赴き調査したことは画期的な事であった。本論の豊後石仏の研究者の諸氏が、国内の石仏に特殊な関心を抱いたのも、客観的に見ればきわめて時宜を得た流れに沿っていたといえよう。

ところで翻って見れば、明治30（1897）年、古社寺保存法が施行され、その際に法隆寺金堂壁画の保存対策が検討された。しかし、その保存調査活動が軌道に乗り出したのは大正2年、岡倉天心が文部省に対して「壁画保存研究会」の設置を提案してからであった。もっとも実質的な活動は、天心没（大正2年9月）後に「法隆寺壁画保存方法調査委員会」が設置され、模写活動が実施されたのであった。このように、国家の精華を数多く蔵していた法隆寺においてすら、このような心許無い実態であった時代に壁画の保存対策が開始された訳である。したがって、このような状況における大正2年に小川博士が、初めて九州の辺鄙な場所にある白杵石仏を訪問し、以後2回に亘り詳細な踏査を実施したことは、極めて驚異に値する出来事といえよう。その成果は、大正3年『日本石仏小譜』（図譜）となり、さらには同年3の「九州の石仏」に結実している。一方、国外の石仏石窟は、大正7年日本人学者としては初めて、関野博士が、天龍山石窟を発見している。また、同6年大村西崖氏は『支那（中国）美術史彫塑篇』を、さらに同氏は同7年『東洋美術大観 第15 彫刻部』を刊行している。実は、同年大村氏は、日名子実三氏を伴って白杵石仏の調査を行い、その成果を「大分県下の古石仏に就いて」として発表。ちなみに、大正8年、和辻哲郎氏の『古寺巡礼』が発刊され古美術に関する関心が高揚していく中、また同年早くも澤村専太郎氏のアジャンター石窟に関する諸論文が矢継ぎ早に発表されている。

このように、大正期の国内外における石仏・石窟研究は、まさにその黎明期の活動に相応しく、意欲的な調査研究が目立っている。中でも前述のように小野・濱田両氏の研究は出色であり、いまなお研究史上において必読・不可欠の論文であることは言うまでもない。つまり、小野氏の仏教芸術史的研究においては、まず仏教教学を踏まえ、しかも伝承を幾分勘案しての方法論に依拠するものであるが、一方の様式史的展開についてはやや不審を抱かれ、観者の主観の差異の幅の甚だしいことを指摘した。これに対して、濱田氏の考古学・美術史学的研究は、まず様式史観と伝承の示す年代との整合性について疑義を抱き、むしろ伝承の作為性を指摘しつつ、様式史の厳格性と客観性を論及した訳である³⁹⁾。

以上、石仏研究の黎明期というべき大正時代の諸論文について収集・分析・整理する作業を通して、当時の白杵石仏に関わる見解の相違を多様に眺望することが可能となった。とはいえ特に諸先学の見解を要約する作業に終始し過ぎて、ややその論旨が散漫になった点もあろうが、

具体的にその展開の跡を辿ることが必要と見定めて分析作業に入った訳である。したがって、研究史の展開を詳細に辿る所期の目的はほぼ達成されたものと考えられる。大正期の日本の石仏研究において、対象とすべき基本的文献については、ほぼ網羅したつもりであるが、もしやしていくらかの不備や疎漏のあろうことは御海容願いたい。

注

- 1) 新納忠之介「磨崖石仏に就いて」(『仏教美術第一巻第三号 大分県満月寺磨崖像乃研究』大正10年4月11日 仏教美術社)。以下『仏教美術』とする。
- 2) 水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』(昭和16年 座右宝刊行会)
- 3) 小川琢治『日本石仏小譜』(大正3年, 玻璃版・20葉, 帙入の図譜)
- 4) 小川琢治「九州の石仏(一)」(『国華292号』大正3年9月 国華社)
小川琢治「九州の石仏(二)」(『国華293号』大正3年10月 国華社)。なお, 本文中では造立年代を明示していないが, 後昭和16年刊水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』(東京座右宝刊行会 昭和16年9月25日)の序文において平安朝と言及。唐末から北宋に至る百年間栄えた呉越王銭氏の時代に成ったものと似通うものがあるのを認め, 日支造仏史の一時期の代表されている事実を知った, と述べている。
- 5) 濱田耕作「豊後の石仏にかんする一考察…石仏製作の基礎的素養…」(『中外日報』大正13年4月)。後『百済観音』(昭和44年10月10日 平凡社)に収録。なお写真はホキ阿弥陀三尊を掲載。
- 6) 濱田耕作『豊後磨崖石仏の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第九冊<大正13年4月-大正14年3月> 京都帝国大学発行/岩波書店)。以下『豊後磨崖仏』とする。なお, これに関しては出版後, 有賀喜左衛門「濱田教授の『豊後磨崖石仏の研究』」(『民族一ノ一』大正14年11月1日 民族発行所)がある。ちなみに有賀氏の書評は, 復刻『民族第一巻上 第一号~第三号』1985年5月20日 岩崎美術社)に収録。また, 『豊後磨崖仏』の復刻版(編著:樋口隆康 昭和51年8月31日 臨川書店)も刊行されている。
- 7) 濱田耕作「日本の磨崖石仏像(上)」(『思想第48号』大正14年10月1日 岩波書店)。同「日本の磨崖石仏像(下)」(『思想第50号』大正14年12月1日 岩波書店)
- 8) 『豊州新報』・『大分新聞』に掲載。両紙は現在の『大分合同新聞』の前身。合併は昭和17年4月3日。
- 9) 小野玄妙「大分佐賀両県下の石仏」(大正11年3月28日発表)。後同氏『大乘仏教芸術史の研究』(昭和2年2月25日 大雄閣)に収録。
- 10) 仲嶺真信「石仏研究の黎明と白杵石仏」(『白杵史談 第86号』平成7年12月20日 白杵史談会)
- 11) 村本信夫「上代に於ける帰化人の仏的活躍と豊後の石仏との関係」(『中央史壇58』大正14年1月1日 国史講習会)。なお村本氏は直良氏ともいい, 昭和6年明石原人発見した。明治35年白杵生れ。
- 12) 大村西崖「大分県下の古石仏に就いて」(『美術之日本 9-9』大正6年9月15日 審美書院 * 審美書院発行兼編輯人: 田邊孝次)
- 13) 天沼俊一「深田の石塔」(『考古学雑誌第六巻第十号』大正5年6月5日 考古学会)。この天沼論文の文末に付記があり。その中で, 河野清実氏の拠り所とする大分新聞抜粋記事・竹田羽峯氏著「豊後と石塔」について記す。河野氏は法華塔と考えたいというが, 天沼氏は果たして法華塔であれば, 法華経奉納が奈良朝以前に有った物とは考えられぬとしている。また付録として, 大分社の「康永四1143年銘」国東塔。八幡村白木の龍雲寺石塔二基(鎌倉)を紹介。
- 14) 大村西崖『東洋美術大観 第15 彫刻部』(大正7年5月 審美書院)。なお, 『美術之日本』を発行してい

る審美書院の発行兼編輯人である田邊孝次氏（美大助教授）は「新発見の大分の石仏」（『美術月報232』大正12年1月15日 美術月報社）と「新発見の竹田の石仏」（『国民美術242』大正13年2月1日 国民美術協会）を發表している。

- 15) 大村西崖「豊後磨崖石像……帝国美術院にて調査に着手す……」（『美術写真画報 一ノ七』大正9年8月1日 博文館）
- 16) 大正7年4月帝室博物館学芸委員・文部省古社寺保存会委員新納忠之助氏が白杵石仏を調査し、この時「我が日本の彫刻」と題して大分市大正紀念館にて講演を行った。（『深田』）
- 17) 朝倉文夫「豊後美術史の研究を提唱す」（『美術写真画報 一ノ七』大正9年8月1日 博文館）。
- 18) 中村不折「日本一の石仏と其保護に就て」（『美術写真画報 一ノ七』大正9年8月1日 博文館）。なお、前掲の朝倉氏の論説の直ぐ後に掲載された中村不折最末尾の彙報部分の中に片々記事があつて、その中に、帝国美術院の新事業、次年度より約三万円の予算にて、帝展費三万円の残額一万円を美術研究奨励事業に充てる筈。又雨潤会の寄付金一千円にて、豊後国磨崖石像の研究に着手する筈と記す。
- 19) 中村不折「白杵の磨崖石仏像に就いて」（『仏教美術第一巻第三号 大分県満月寺 磨崖仏像乃研究』大正10年4月11日 仏教美術社）。以下『仏教美術』とする。
- 20) 小林正盛「満月寺の磨崖石仏像に就いて」（前掲『仏教美術』）
- 21) 「全国無比の折紙が付いた大分県下の石仏」（『大正10年9月8日 福岡日日』）。なお、上記記事は『大正ニュース事典 第五巻』（1988年 毎日コミュニケーションズ出版部）に収録。
- 22) 岡田三郎助「大分石仏の系統」（『美術之日本13-9』大正10年9月20日 審美書院）文末に「大阪時事」と記されているので、もとは新聞記事であろう。
- 23) 岡田三郎助「大分及佐賀県の石仏」（『国民美術 242』大正13年2月1日 国民美術協会）。これも文末に「談」と示されているので、もともと談話であろう。文中には、岡田氏が写真撮影と実測を担当し、石仏の宗教及歴史上の事は小野氏が分担したことについて触れ、また、その概略の報告は田邊孝次（美大助教授）氏の調査の分を補って大正12年3月に配布されたものの、印刷前に震災によって写真原稿全部を焼失（大正12年9月）。したがって、目下それを復興する準備中であり、その中には岡田氏の受け持った写真と実測図を印刷するので、詳細はそれに譲ることとして大体の種類を述べるつもりであると述べている。
- 24) 仲嶺真信「白杵石仏群の造立年代とその背景について」（『史学論叢第25号』平成7年 別府大学文学部史学科）
- 25) 注9参照。小野「大分佐賀両県下の石仏」（大正11年3月28日発表）。なお、小野博士の論文末には次の追記がある。すなわち、本論文は大正十年帝国美術院の命を受けて岡田三郎助氏指導のもとに踏査した時の報告書の草案。その際撮影した写真209枚、実測図64枚は、直接に帝国美術院から發表される計画で、夙に上梓に着手し製版も進行中であつたが、不幸にも12年9月の震火に焼失し、ついに公刊の機会を逸した。殊に濱田博士が彪大なる報告書を著作して弘くその真価を学壇に報告（大正14年）せられたことは、斯学のため実に感謝に堪えぬ。実はこの大分の石仏に就きては、私としてその後多少とも新に得た知識もあり、且つ濱田博士の報告書により啓発せられたころも尠なくなく、補説せねばならぬ資料も相当無いではないが、今回は特に自分の或る紀念のために一字一句も朱筆を加うことなく旧草のままこれを製版。私は東洋に遺存する石彫仏像全体の上から觀察して、この大分の石仏に向つて学術上充分な真価を認めて置きたい。凡そ大乘仏教の發達は密教を以て最後とするが、今大分の石仏亦大陸系統の石彫芸術としての最終期のものであり、而かもそれが初期密教の代表たる点に於て、絶対の価値がある、云々。

- 26) 小野玄妙「弘法大師以前の密教芸術…特に大分の石仏に就いて…」(『密教研究25』昭和2年7月1日 高野山大学密教研究会)
- 27) 田口掬汀「京都から摩崖仏へ」(『中央美術7-4』大正10年4月1日 日本美術学院)
- 28) 大正10年8月, 宗教大学教授・小野玄妙と美術学校教授・岡田三郎助の二氏は共に, 帝国美術院から石仏調査のため派遣された。調査後「大分の石仏に就きて」報告講演を行ったという(小城長郎『深田の石仏』昭和4年6月刊・所収 p93)。
- 29) 天沼俊一「満月寺址の石塔及板碑」(前掲『仏教美術』)。なお, この論文は, 大正十年三月十二日欧米漫遊の途に就かんとする前一ヶ月稿了と注記されている。また編集者の後記には以下のように記されている。
「上記天沼博士の五輪塔に関する玉稿は大正九年の秋, 一度起稿をして下さったが, 其の後今の様に一層委しく図版を添えて御寄稿下さった御厚意を讀者と俱に多謝する次第である。小川博士も此の五輪塔に就いては充分趣味も持たれ且つ研究もされている。而して五輪塔の形から寸尺迄移し採り, 原型そのままのものを父母の墓標として前年京都の東山へ建設。白杵迄一寸行けない人は此の天沼博士の記事を見て後ちに小川博士家の墓地に行つて見れば徹底的に判るであらう。何れ博士は, 此の白杵の石仏に就いて本誌に御寄稿下さるであらう」(編者付記)。この後に, 大正五年一月三十一日付の深田の見取り図(手書き)が載っている。同年四月十六日にも再度調査をされた旨を記し, 文末の追記には大正九年十一月十一日の日付あり。山王石仏を阿弥陀三尊と誤記している。(注13参照。天沼「深田の石塔」)
- 30) 注1参照。新納忠之介「磨崖石仏に就いて」
- 31) 注5参照。濱田「豊後の石仏にかんする一考察…石仏製作の基礎的素養…」
- 32) 注6・濱田『豊後磨崖仏』参照。序言には次のことが述べられている。すなわち, 豊後石仏は本学教授小川琢治君の大正二年より三年に亘り初めて踏査し学界に報告。濱田氏は小川博士の誘導により, 此等石仏を研究する機会を得, 大正十一年四月助教授澤村専太郎氏と共に, 大分及び白杵の石仏を調査した。以後その成果を公表しようとしたが, たまたま澤村氏の(インドへの)海外留学により事業が継続されず, 未完のままに放置されていた。そこで, 大正十二年四月文学部教務嘱託梅原末治氏に嘱して再び白杵地方の石仏の調査に従事させ, 又十三年三月助手島田貞彦君を派して, その一部を補はしめたが, 不十分であったので, 遂に本年一月自ら大分地方の石仏を再訪し, さらに大野郡及び西国東郡の石仏について未見のものを調査し, 比較研究することが出来た。そして, いよいよ本冊の印行に至った訳である。此の間小川博士が始終直接間接その研究に好意を寄せられ, また, 澤村文学士から提供の調査手記も頗る重要な資料となった。又大正十三年一月豊後石仏を調査した本学教授文学博士松本文三郎氏の観察の成果, 及び工藤氏の「豊州磨崖石佛」(大正10年)及び小野氏の「大分の石仏に就いて」(大正11年)の二著からも多くの示教を得ている。(緒言を大正十四年一月に記す)。
- 33) 工藤利三郎『豊州磨崖石仏 日本精華・第九輯』(日本精華社 大正10年4月20日, 表に小川琢題簽/喜田貞吉氏は序に「日本精華・第九輯豊州石仏の発行を聞きて」識すとあり) 写真集。
- 34) 伊東史朗「仁和寺北院薬師檀像について」(『仏教芸術177号』昭和63年 毎日新聞社)
- 35) 注24(前掲仲嶺論文)参照。
- 36) 仲嶺真信「白杵石仏群」(賀川光夫編『白杵石仏』平成7年 吉川弘文館)参照。
- 37) 濱田耕作「日本の磨崖石仏像(上)」(『思想第48号』大正14年10月1日 岩波書店)
- 38) 濱田「日本の磨崖石仏像(下)」(『思想第50号』大正14年12月1日 岩波書店)。なお, 「日本の磨崖石仏像(上・下)」は, 後復刊されて『思想(復刻版4<第39~第50号>』(1982年12月8日 岩波書店)に収録

されている。

- 39) なお、主に濱田耕作氏の(考古学)美術史的業績について以下にまとめよう。濱田博士は、明治14<1881>年、2月22日に生まれ、東京帝国大学卒業、明治42年に京都帝国大学講師。大正2<1913>年から5年<1916>までイギリス留学、エジプト考古学で有名なピトリらに師事。帰国の年、本国大学初の考古学講座を開設。大正6年教授、昭和12年総長に任命、総長現職半ば昭和13<1938>年7月25日に死去。現在の京都大学文学部考古学教室の初代教授。その門下水野清一(明治38<1905>年3月24日一昭和46<71歳>年5月25日)氏は、東亜考古学会の北京留学生、帰国後、東方文化学院京都研究所研究員。同研究所員の長広敏雄とともに昭和11年(1936)から響堂山、龍門、雲岡諸石窟を調査。大正14年、原田淑人、馬衡らと東亜考古学会設立。大学で最初の担当講義は「日本美術史」。著作も多く、『百済観音』(イデア書院 大正15年<1926>)『日本美術史研究』(座右宝刊行会 昭和15年12月10日)や『東洋美術史研究』(座右宝刊行会 昭和17年9月30日)など。岡倉天心ら創刊の『国華』(明治22年<1889>10月創刊)に頻繁に投稿。なお、論文の投稿外に、『国華278号』に「瀧・濱田両氏の近況」/『国華574号』に「故濱田耕作博士」/『国華603号』に「濱田耕作氏遺書『日本美術史研究』/『国華630号』に『東洋美術史研究』など掲載。なお、濱田耕作『日本美術史研究』中に、「日本の磨崖石仏像(上・下)」(『思想』第48号、岩波書店、大正14年10月1日、第50号、大正14年12月1日)収録。P127からP159までの内、P144-145間にある「白杵町深田堂ヶ辻薬師三尊」の写真は、実は「ホキ第二群第一龕の阿弥陀三尊像」の誤り。掲載図は左斜めからの撮影。

追記 大正期の論文にて使用された旧漢字書体は、一部新漢字に改めた。

《写真出典》

写真1・2・4・5・6・7② 『豊後磨崖仏』

写真3 『豊州磨崖石仏』

写真7①・7③・8 『仏教美術』

写真9 筆者撮影

《挿図出典》

挿図3～8 『豊後磨崖仏』



写真1 ホキ第二群第二龕



写真2 ホキ第二群第一龕



写真3 ホキ第一群第四龕

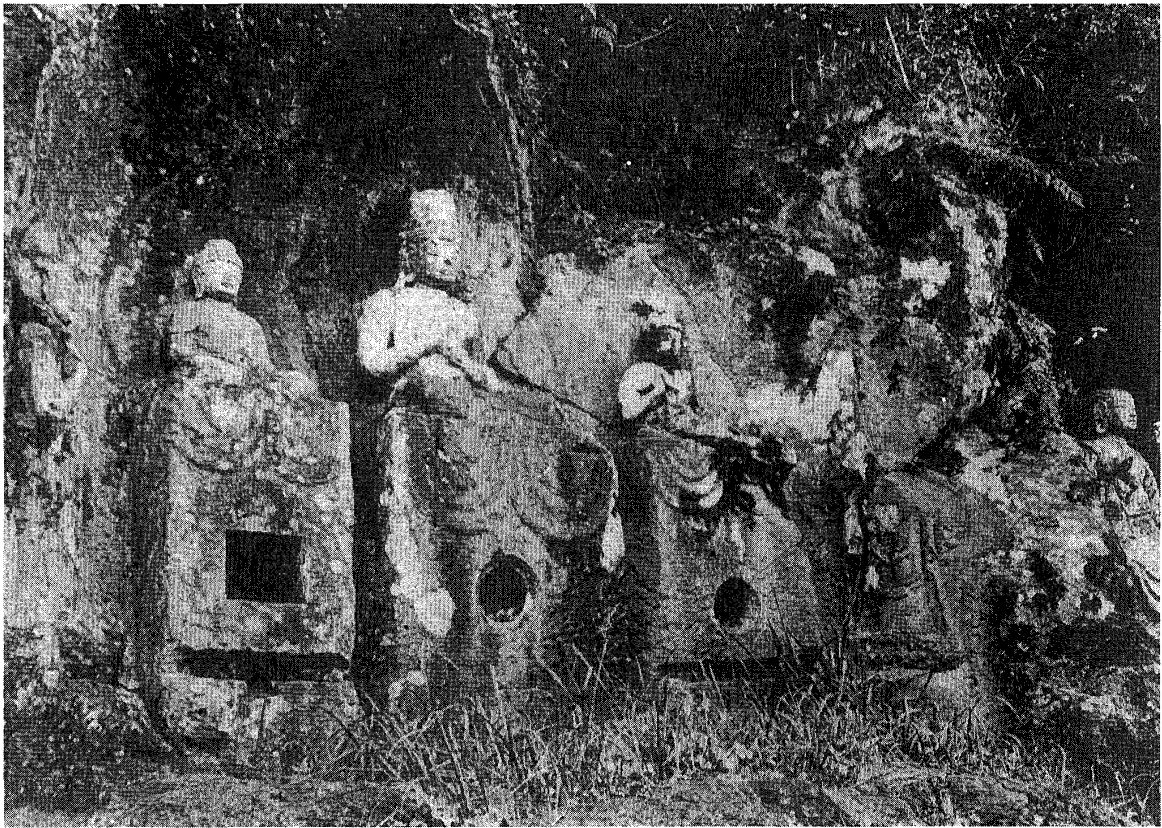


写真4 ホキ第一群第三龕

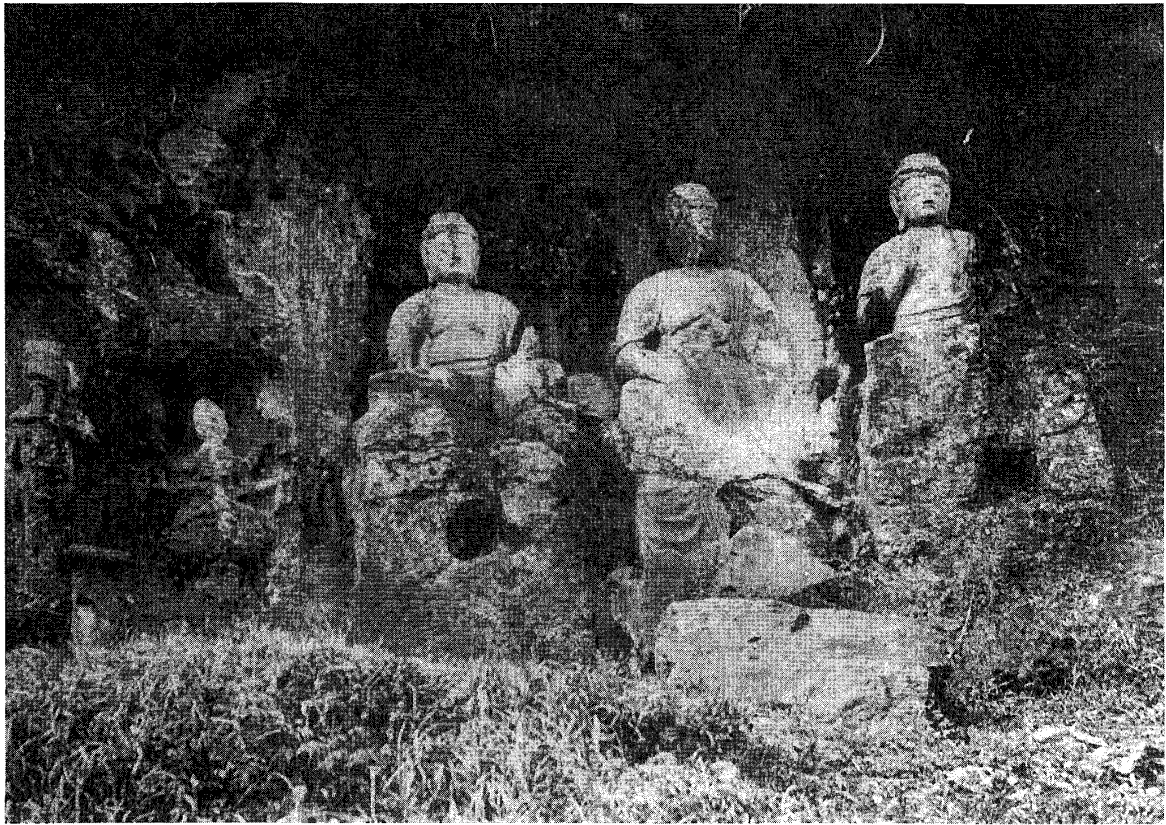


写真5 ホキ第一群第二龕

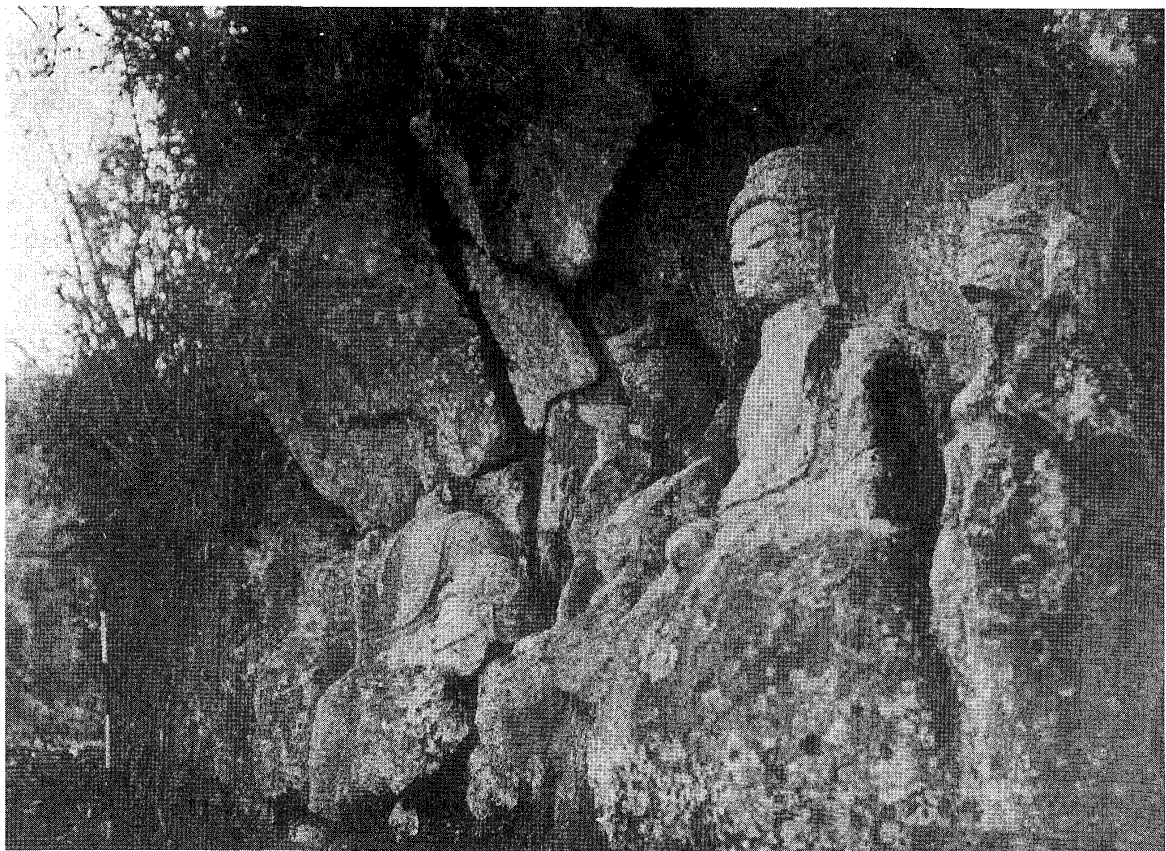


写真6 ホキ第一群第一龕

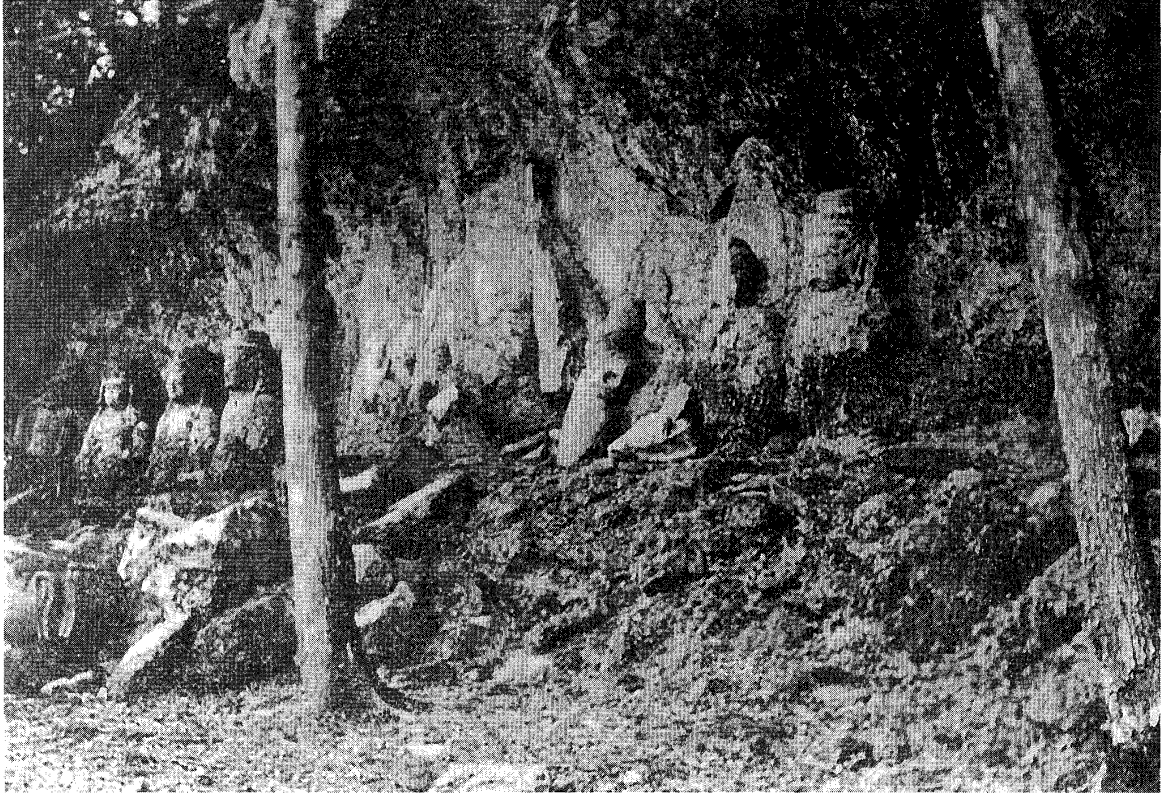


写真7① 古園石仏 (大正10年頃)

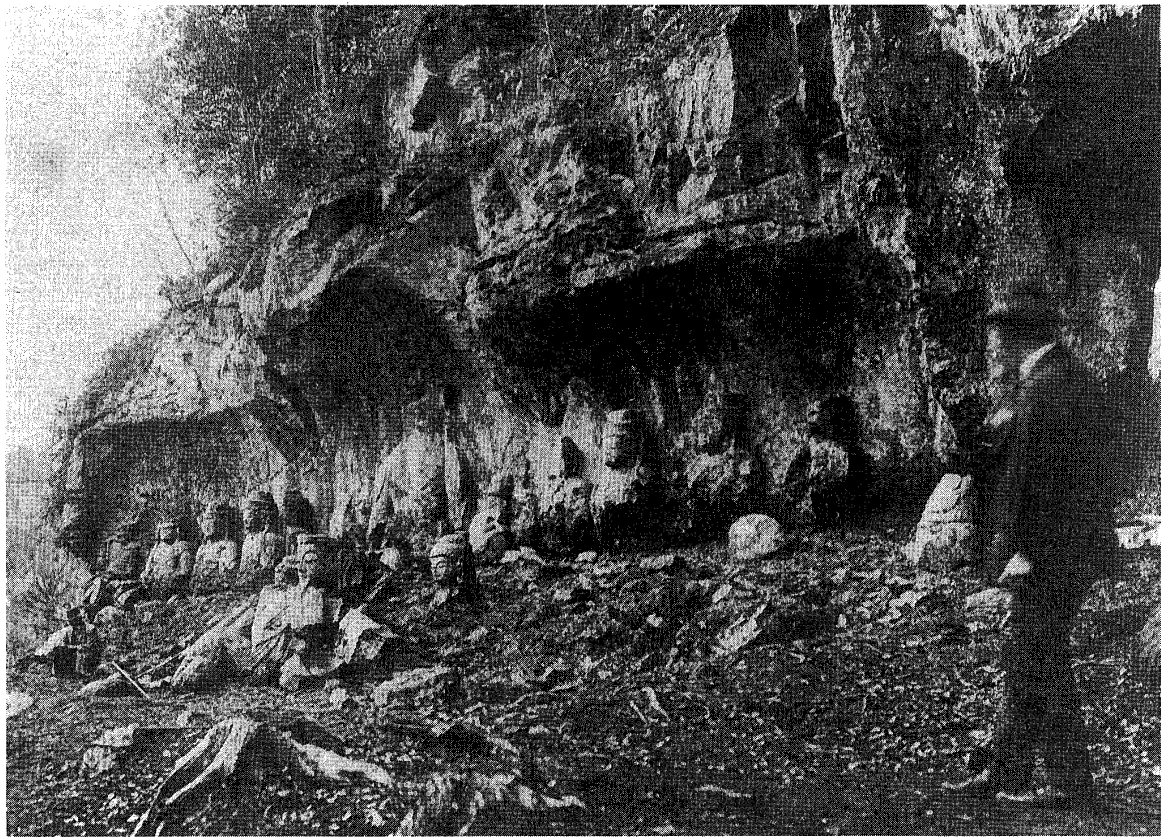


写真7② 古園石仏 (大正14年頃)



写真7③ 古園石仏 (大正10年頃)



写真8 山王石仏

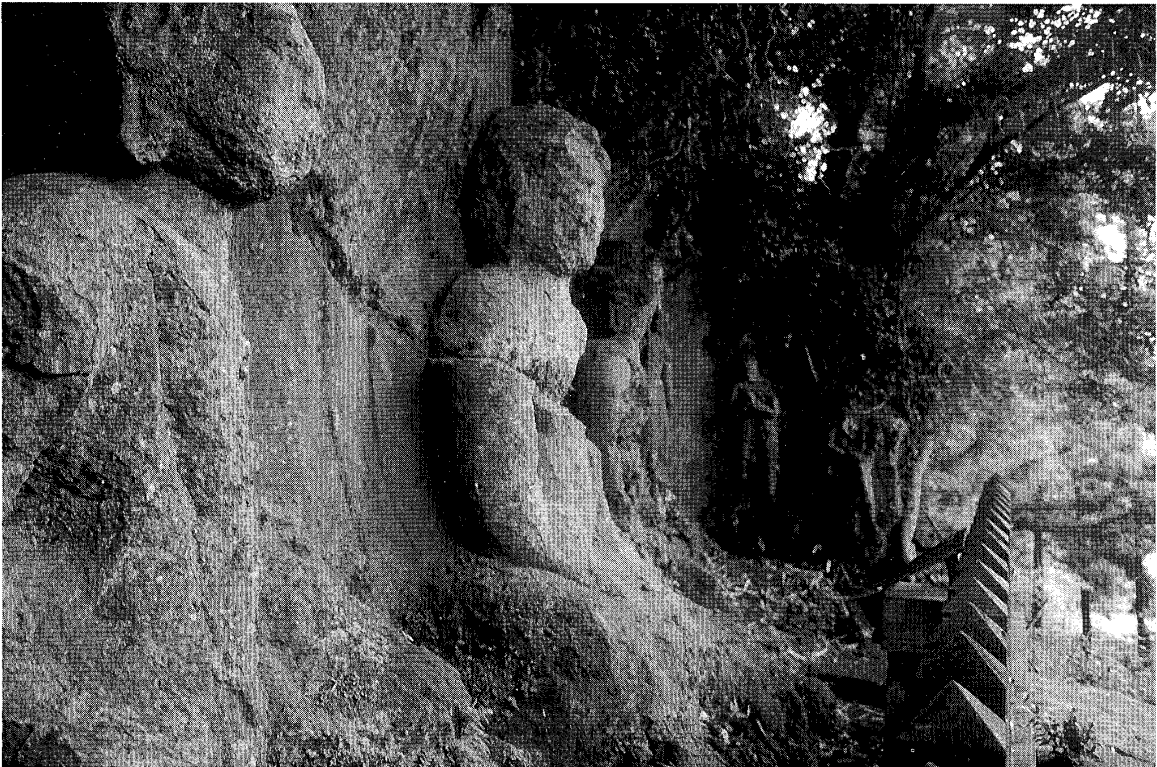


写真9 門前石仏